42
303

宠神注

壮丽

[illegible]

42-383

例言

一、本書ハ日露戦争ニ参加シタル将官ノ功績ヲ顕彰センガ為ニ編纂シタルモノナリ

一、日露戦争参加将官中本書ニ掲ケサルモノ尠シトセス他日ヲ期シテ増補スル所アラントス

一、書中記載ノ事項ハ交戦當時ニ於ケル新聞雑誌感状録等ヨリ蒐集シタリ而シテ經歴ノ正確ヲ期スル爲ニハ停年名簿ニ據リテ彼我引照シタリ

一、位勲爵官等ニ關シテハ最近發行ノ華族名簿及ヒ職員録ニ從ヒ考査シ其缺ケルモノハ照會ノ上掲載シタリ

一、書中將官相當官及ヒ將官ニ非サルモ日露戦役ニ際シ功績顯著ナルモノハ之ヲ編入シタリ、下瀬博士ノ如キ是ナリ

明治 42 9 1 内務

一、本書編纂に關しては曩に本社發行の「東郷大將傳」の著者濱中仁三郎氏の助力を待つ所多し一言謝意を表す

一、本書は短期の間に編成を了したるを以て用字用語等尠からざるべし又本書印刷中將官に異動を生じたるものあり何れ改版の際訂正を加ふることゝすべし

明治四十二年七月下浣

日露戰爭紀念社編輯局識す

日露戰爭紀念將官列傳 目次

○陸軍大將　頁

一陸軍大將元帥…公爵…故山縣有朋…一
一陸軍大將元帥…公爵…故大山巖…五
一陸軍大將……侯爵…故野津道貫…九
一陸軍大將……伯爵…黒木爲楨…一三
一陸軍大將……伯爵…奥保鞏…一七
一陸軍大將……伯爵…故佐久間佐馬太…二一
一陸軍大將……伯爵…故兒玉源太郎…二三
一陸軍大將……伯爵…故乃木希典…二九
一陸軍大將……子爵…故岡澤精…三一
一陸軍大將……子爵…川村景明…三三
一陸軍大將……侯爵…故柱太郎…三五
一陸軍大將……子爵…故長谷川好道…三七
一陸軍大將……子爵…西寛次郎…三八
一陸軍大將……子爵…小川又次…四〇
一陸軍中將……子爵…故寺內正毅…四二
一陸軍大將……子爵…故立見尚文…四三
一陸軍大將……子爵…大島久直…四五
一陸軍大將……子爵…大島義昌…四六
一陸軍大將……子爵…大迫尚敏…四八
一陸軍大將……男爵…井上光…五〇

○海軍大將

一海軍大將……子爵…井上良馨…五二
一海軍大將……伯爵…故伊東祐亨…五三
一海軍大將……伯爵…東郷平八郎…五五
一海軍大將……伯爵…山本權兵衛…六四
一海軍大將……男爵…柴山矢八…六六
一海軍大將……男爵…飯島員規…七〇

○陸軍中將

一陸軍中將……男爵…故松村務本…七〇
一陸軍中將……男爵…大久保春野…七六
一陸軍中將……男爵…上田有澤…七九
一陸軍中將……男爵…西島助義…七一
一陸軍中將……男爵…淺田信興…七三

一陸軍中將……男爵……飯田俊助……一四
一陸軍中將……男爵……塚本勝嘉……一五
一陸軍中將……男爵……木越安綱……一六
一陸軍中將……男爵……土屋光春……一六
一陸軍中將……男爵……原口兼濟……一七
一陸軍中將……男爵……安東貞美……一八
一陸軍中將……男爵……故前田隆禮……一八
一陸軍中將……男爵……村木雅美……一八
一陸軍中將……男爵……鮫嶋重雄……一八
一陸軍中將……男爵……石本新六……一八
一陸軍中將……男爵……山中信儀……一八
一陸軍中將……男爵……平佐瓦藏……一八
一陸軍中將……男爵……岡崎生三……一八
一陸軍中將……男爵……渡邊章……一八
一陸軍中將……男爵……中村覺……一八
一陸軍中將……齋藤太郎……一九〇
一陸軍中將……男爵……有坂成章……一九一
一陸軍中將……男爵……上原勇作……一九二
一陸軍中將……男爵……伊知地幸介……一九三

一陸軍中將……男爵……宇佐川一正……一九六
一陸軍中將……楠瀬幸彥……一九七
一陸軍中將……一戸兵衛……一九八
一陸軍中將……内山小二郎……二〇〇
一陸軍中將……落合豐三郎……二〇〇
一陸軍中將……東條英敎……二〇一
一陸軍中將……松永正敏……二〇二
一陸軍中將……木村有恒……二〇三
一陸軍中將……鈴々木直……二〇四
一陸軍中將……兒玉恕忠……二〇五
一陸軍中將……田部正壯……二〇六
一陸軍主計總監……男爵……外松孫太郎……二〇六

○海軍中將

一海軍中將……男爵……上村彦之丞……二〇七
一海軍中將……男爵……出羽重遠……二〇九
一海軍中將……男爵……瓜生外吉……二一〇
一海軍中將……男爵……片岡七郎……二一三
一海軍中將……男爵……三須宗太郎……二一四
一海軍中將……男爵……伊集院五郎……二一五

一海軍中將……男爵……日高壯之丞……二一六
一海軍中將……男爵……齋藤實……二一七
一海軍中將……尾本知道……二一八
一海軍中將……男爵……梨羽時起……二一九
一海軍中將……男爵……故東郷正路……二二〇
一海軍中將……細谷資氏……二二〇

○陸軍少將

一陸軍少將……九井政亟……二二三
一陸軍少將……澁谷在明……二二三
一陸軍少將……摺澤靜夫……二二三
一陸軍少將……長岡外史……二二四
一陸軍少將……大谷嘉久藏……二二五
一陸軍少將……福永宗之助……二二六
一陸軍少將……永田龜……二二六
一陸軍少將……梅澤道治……二二七
一陸軍少將……秋山好古……二二八
一陸軍少將……依田廣太郎……二二八
一陸軍少將……馬場命英……二二九
一陸軍少將……豐島陽藏……二三〇

一陸軍少將……友安治延……二三一
一陸軍少將……故山本信行……二三二
一陸軍少將……岡市之助……二三四
一陸軍少將……池田正介……二三五
一陸軍少將……石原應恆……二三五
一陸軍少將……鎌田宣正……二三六
一陸軍少將……本郷房太郎……二三六
一陸軍少將……小原芳次郎……二三七
一陸軍少將……岡田貫之……二三八
一陸軍少將……小泉正保……二三九
一陸軍少將……村山邦彥……二四一
一陸軍少將……神尾光臣……二四二
一陸軍少將……佐治爲善……二四二
一陸軍少將……谷山隆英……二四三
一陸軍少將……田村久井……二四四
一陸軍少將……抑上森藏……二四四
一陸軍少將……南部辰丙……二四五
一陸軍少將……井口省吾……二四六
一陸軍少將……腦井茂太……二四七

一陸軍少將……島村干雄……一四八
一陸軍少將……村田淳……一四九
一陸軍少將……兒玉軍太……一五〇
一陸軍少將……今村信敬……一五〇
○海軍少將
一海軍少將……鳩村速雄……一五一
一海軍少將……加藤友三郎……一五三
一海軍少將……伊知地彦次郎……一五四
一海軍少將……山田彦八……一五五
一工學博士……下瀨雅允……一五六
○附錄
一陸軍各師團配備表……一五八
一日露戰役誌……一六一

日露戰爭紀念將官列傳

陸軍大將元帥正二位大勳位功一級 公爵 山縣有朋

山縣元帥名は有朋、天保九年閏四月二十二日を以て長州萩に生る父を三郎といひ國文を以て著はる公幼名を辰之助又小介と稱し後狂介と稱す維新の始高杉晉作、大村益次郎等と共に志を同うし兵馬の間に俗論党を劫けて自滅せしめ奇兵隊を率て幕軍を破り以て長州の藩論を定むるを得たり明治戊辰の役黒田清隆西郷隆盛等と參議となり藩兵を率て越後に入り幕軍と戰て長岡城を復し更に進みて奥羽各地に轉戰し途に東北の賊軍を平定し凱歌を奏して歸る其賞として賞典祿六百石を賜はる時に明治二年六月二日なり同年朝命に依り西郷從道と共に露佛二國の地理形勢視察に赴き使命を全ふして歸朝せり後同七年台灣の變同十

年西南戰爭には賊軍掃討の功拔群の器を得て其に優渥なる勅語を拜受するに至れり同十四年には大山巖と共に連署して砲台を東京附近の灣口に築き以て其守備を嚴にせんことを請ひ聽さる同十七年七月特旨を以て華族に列せられ勳功に依り特に伯爵を授けらる同二十七八年日清戰役には監軍陸軍大將第一軍々司令部長として出征し勅語に依り歸朝す

明治三十一年一月元帥府に列せられ特に元帥の稱號を賜ふ公國務大臣としては陸軍卿二回內務卿一回內務大臣一回農商務大臣一回司法大臣一回內閣總理大臣三回明治三十七八年日露戰役には參謀本部長となり其間施設する所謀からず公號を含雪と稱し一回司法大臣一回內閣總理大臣三回明治三十七八年日露戰役には參謀本部長となり其間施設する所謀からず公號を含雪と稱し詩歌に巧なり左の二首尤も人口に膾炙せらる

到處江山新戰場、荒涼風色悲重陽、平安道上秋將老、
又擁盛京城外霜
木留山けぶる砦のすてかゝり白むと見れば櫻なりけり

明治三十八年十二月七日大山滿州軍總司令官凱旋陸下には一行及び大本營幕僚に酒饌を御前に賜はる其席上山縣元帥は兩陸下の萬歲を三唱し後大山司令官に對し左の頌詞を呈せり

本日は大山總司令官閣下以下總司令部職員諸君の名譽なる凱旋を迎へ且其崇重すへき戰況奉告の庶に參列し今又茲に恩賜の酒饌を共にし別來內外經過の情況を獻酬談笑の間に交換するは吾人の尤も光榮とする所なり

余は大山閣下以下の勇健なる姿容を見其偉大なる功業を思ひ洵に感激に堪へず爰に陸下に奏請し茲に一言頌辭を述ふるの可を得たり

昨年七月總司令部出征後余乏を戰時參謀總長の要職に受けて より以來一年有半陸下の帷幄に參畫し幸ひに大過なきを得たるは偏に大元帥陸下の聖明允武なる御指導と總司令官幷に總參謀長以下の協同奮勵深謀善戰の力に因るものにして余の

深く感佩する所なり

戰役當初我陸軍は第一軍をして敵を鴨綠江畔に敗らしめ此機に乘じ第二軍を遼東半島に揚げ敵の左翼右顧するに當り第四軍を其中間太沽山に上せ第二軍の敵を南山に擊て之を南方に驅逐するや直ちに第三軍を進め之に代りて旅順方面に對せしめ茲に攻め第二軍をして急轉して第一、第四軍と呼應北進せしめ茲に攻守の大勢を定めたり此間大山元帥閣下には陛下の幕僚長として三軍齊しく北進の途に上り而して此機敏なる運用に參劃し而之を叫合して策應協同其目的に向はしめしが滿洲軍總司令部前古未聞の偉績を收めしめたり是實に總司令官の重職を奉じ計劃指揮其宜しきを得遼陽に沙河に奉天に戰史以來未曾有の大戰を交へ戰線の長きは數十里に及ひ提兵數十万毎回激戰數旬に亘り炎熱を冒し寒を凌き克く困苦缺乏に堪へ常に優勢の敵を擊破し敵軍をして前古未聞の偉績を收めしめたり是實に總司令官其人を得

聖明允武なる陛下の神算は實行其節に當り忠勇無比の將卒は上下協同益其能力を發揮したる結果にして此統帥たる總司令官の勳業は長へに汗青を照して決して磨滅せさるへし余は茲に杯を擧けて其空前の常勝軍たる大山總司令官の幕僚長として此大業を參劃補佐して遺算なからしめたる兒玉大將の健康を祝せんとす

次に余は尚此常勝軍たる大山總司令官の健康を祈らんとす

陸軍大將元帥正二位大勳位功一級公爵　大山巖

大山元帥名は巖大山彥八の次男にして大山綱良の弟に當り西鄕隆盛とは從兄弟の間柄なり天保十三年十月十二日鹿兒島に生る通稱を彌助といひ西鄕從道と共に薩摩の二俊才と稱せらる明治維新の際國事に奔走し戊辰の役西鄕隆盛の部下に屬し大に戰功あ

り後歐洲に遊學し瑞西に滯留兵學を研究すること數年歸朝後陸軍少將に任せらる明治十年西南戰爭には別働隊を率て田原坂に激戰し亂平ぎて凱旋し十一月軍功により中將に進む同十七年七月勳功に依り伯爵を授けられ同廿三年一月には愛國の衷情を表し海防事業を贊成し金二千五百圓献納したるが爲め其賞として銀製黃綬褒章を賜ひ後二十七八年戰役には第二軍々司令部長となりて征途に上り連戰連捷遂に四百餘州を併呑せんとするに際して媾和成り其勳功に依り功二級に叙し金鵄勳章を賜ひ特に侯爵に陞授せらる同三十一年一月元帥府に列せられ元帥の稱號を賜ふ同三十七八年日露戰役には滿洲軍總司令官となり百萬の猛將勇卒を率て各地に轉戰し奉天の一擊敵膽を奪ひ露軍沮喪して和を請ふに至る鹵獲山の如く皇威五洲に震ふ公天資敦厚度量寬裕名利に淡く敢て巧智を弄せす才識を衒はす諄々として人を率ゆ故に人望自ら歸し三軍を指揮すること恰も手指を動すが如し

宜なり連戰連捷の効果を收むることや公往年木戸松菊と松島に遊び詩あり

客舍喧嘩奈苦情、幾回僕指數歸程、一宵流涕無窮淚、
日月如馳髀肉生、舟回西岸入灣東、島々途連十里中、
日暮孤帆歸路遠、金花山上月如弓、

明治三十八年十二月七日大山總司令官は東都に凱旋して宮中に參內陛下の御前に進みて戰鬪經過計劃に就きて奏上し陛下より種々御下問あり次で左の勅語を賜はりたり

卿昨年以來滿州軍を指揮し大小數十回の交戰悉く偉功を奏し以て出師の目的を達し洵に朕か望に副へり

朕今親しく作戰全局の情況を聽き更に卿の勳績と將卒の忠勇とを嘉尚す

其際大山總司令官の復命したる所左の如し

復命書

臣巖

客歳六月滿州軍總司令官たるの大命を奉じ爾來遼陽に敵の戰略要地を奪ひ沙河に其南進の鋭鋒を挫き旅順に堅城を陷れ黑溝臺に敵の大企圖を摧き奉天に大軍を擊碎し其他大小交戰數十回一として戰捷を博せざる無く以て開戰當初の目的を達することを得たるは偏に

陛下の御稜威と將卒の忠勇に依らずんばあらず尙國民の忠勇なる後援は有形無形上將卒の士氣を鼓舞し海軍の偉大なる戰捷は沿海の作戰に大なる効果を及ぼし殊に軍の大動脈たる海上の連絡線を鞏固にし內外當局官憲の熱誠なる努力は中外の事情を明瞭にし諸般の補給を確實にし衛生の効果を全うし以て作戰の指導に一大援助を與へたり是れ臣等の常に感喜する所なり而して生命を犧牲に供したる幾多將卒の爲めには哀悼

の情を禁ずる能はず今や平和克復し閫外の任全く畢り天顏に呎尺するの光榮を得感激の至りに堪へず各軍に於ける作戰の概況は其凱旋に應じ當該軍司令官をして奏上せしむ

右謹んで復命以聞す

明治三十八年十二月

滿州軍總司令官 侯爵 大山巖

陸軍大將從二位勳一等功一級 侯爵故 野津道貫

野津元帥は天保十二年十一月晦日を以て生る初め七次と稱す夙に勤王の大志を抱き兄鎭雄と共に國事に奔走す家世々鹿兒島藩

士たり安政年中藩主島津公兵制を改革し西洋式を用ふるに及び藩命を以て江戸に來り江川太郎左衛門の塾に入り砲術を研究し後藩兵六番隊長に拔擢せらる維新の役伏見鳥羽より東山道を經て常總の野に進撃し更に越後に轉戰し右脚に負傷す亂平ぐの後藩兵二番大隊少佐に任せられ明治五年五月大佐に進み陸軍省軍務局副長となる仝六年冬西鄕隆盛征韓論合はざるを以て桐原、徠原等と共に冠を挂けて歸縣し同十年兵を薩摩に擧げ陸下に奏狀を名とし東上せんとするや征討參謀長として九州各地に轉戰し賊軍其驍勇に驚く田原坂の役彈丸雨注を意とせず嶮岨を侵して日中綬章を賜ふ同十七年七月特旨を以て子爵を授けられ華族に列せらる同十八年二月特派全權大使伊藤博文に隨行して天津條約を締結し歸朝後陸軍中將に任し廣島鎭臺司令官となる同二十七八年日淸戰役には同師團を率て出征し山縣第一司令官皈朝するに及び其後任となり平壤、九連城、蓋平、海城、牛莊、營口、田庄臺等に激戰し連戰連捷の上凱歌を奏して歸る其勳功により同廿八年三月陸軍大將に任し同年八月伯爵に陞叙せらる同三十七八年日露戰役には第四軍々司令官となりて出征し岫巖、分水嶺、栃木城、鞍山店、遼陽、沙河等に轉戰し常に第一軍(黒木軍)第二軍(奥軍)の中堅となりて兩軍の進撃を援護せり之を以て兩軍到る處に大捷を得其後侯爵を陞授けらる將軍奇略百出能く忍び能く戰ふ嘗て日淸戰爭中陣中にあるや一電一信を送る毎に必ず執じて曰く川凍り地凍り亦一の我行を妨ぐるものなし是天與なりと其元氣想察せらる今左に日露戰役に於る第四軍の戰闘經過を掲げ以て其功績の大なるを示さん

復命書

大命を奉し大孤山の一角に上陸し獨立第十師團の任務を繼承して第四軍を統率せし以來析木城を攻略して第一軍第二軍間

の連繫を鞏固にし遼陽南面の堅壘を陷れて敵を太子河の右岸に壓迫し沙河會戰に於ては敵を三塊石山に擊破して西溝山勝山間一帶の高地を奪取し奉天會戰に方りては先つ渾城堡を拔き以て渾河堡及び其北方より七間房に亘る渾河右岸の敵陣を突破して奉天を東北方より包圍し當面の敵軍をして幾んど殲滅に皈せしめたり惡軍深く朔北の野に入り征役幾んと二裘葛に亘りしと雖も旺勃たる士氣は一難を經る毎に一倍し來り陣中衛生の如きは有史以來未曾有の好果を收め得たり臣道貫の乏しきを以て本大戰役に於ける一方の統帥に任し甚しき過失なきを得たる所以のものは是れ全く陛下の聖旨を体して高級統帥部の指導周到なりしと各部團隊の奮策其宜しきを得たるの致す所にして官民後援の力亦與て多きに居るものたることを感銘す軍は屢々敵の中堅に衝突し戰爭は多大の犧牲を以て之を購ひ得たるの場合多く爲めに陛下の忠良を矢石の間に失ふこと多かりしは臣の夙夜恐懼措く能はざる所なり

今や軍司令部の凱旋に際し天顏に咫尺して作戰の經過を奏上するの光榮を擔ひ感泣の至りに堪へず茲に作戰、經理、衛生の概略通信網目幷に兵站設置圖の別冊を具し誠恐誠惶謹んで復命す

明治三十九年一月十七日

第四軍司令官陸軍大將伯爵　野津道貫

陸軍大將從二位勳一等功一級伯爵　黒木爲楨

黒木陸軍大將、名は爲楨、幼時七左衛門と稱す弘化元年三月十六日を以て薩摩國鹿兒島市加治屋町に生る老西郷を師父とし、桐野利秋、篠原國幹、大山巖、伊地知正治、野津鎭雄、川村純義、邊見十郎太、村田

新八等の諸先輩に兄事し多年其軍事的思想と戰士的膽略を實地に鍛練せらる慶應丁卯の歲　年二十四にして四番大隊半隊長となり川村純義の部下に屬して鳥羽伏見の戰に參加し勇猛比なく青年將校として大に武名を輝せり後白河若松に轉戰し奥羽平ぐに及んで鄕里に凱旋し藩兵の訓練に從事せり明治二年二月第一番大隊一番小隊長となり同四年徵されて東京に來り陸軍大尉に任せらる翌五年少佐に進み近衛歩兵第一大隊長となり同八年に は中佐に進み廣島鎭臺第十二聯隊長となり西南戰爭には九州鎭臺所の司令官として八代口に奮戰し薩軍の背後を衝きて熊本城の重圍を解き進みて都城を攻め陷し遂に薩軍を掃討せり同十一年一月戰功に依り勳四等に叙し旭日中綬章を授けられ年金百八圓を賜り同年大佐に昇進せり爾後累進して同二十五年十一月には中將となりて第六師團長に補せらるる廿七年日清兩國の平和破れ干戈を交ゆるに及びては大山大將に屬し清國山東省の龍睡島に上陸して威海衛を攻撃し其東方高地を占領して遂に威海衛を陷落せしめたり清國和を乞ひ償金を出し平和克復するや軍功に より男爵を授けられ功三級に叙し金鵄勳章並に年金七百圓を賜り旭日重光章を授與せらるる後近衛師團長に補せられ又西部都督を拜し三十一年陸軍大將となり正三位に陞りぬ三十七八年日露の役起るや第一軍々司令官となり鴨綠江、摩天嶺、石門嶺、樣子嶺、賽馬集、橋頭、楡樹林、及び遼陽、奉天の各所に轉戰し遂にスラーブ種族を討破りて空前嚆古の大勝を博し其壯擧は大將の出征訓示と其に永く國民の忘るべからざる所なり

三十七八年役大將凱旋の節復命及勅語左の如し

勅語

卿第一軍を指揮し開戰第一大に敵を鴨綠江に破りし以來各地の戰圍成く偉功を奏し克く其軍の任務を達し洵に朕か望に副へり朕今親しく作戰の經過を聽き更に卿の勳績と將卒の忠勇

を嘉尚す

凱旋當日黒木司令官の復命左の如し

復命書

臣爲楨

門外の重任を辱うし帝國陸軍の先頭として大同江口に上陸したる以來茲に二十有餘月其間韓國に滿州に常に地形險峻人煙稀少の地域に行動し雄大強勇なる敵に對し大小五十餘戰臣等の不敏を以てして宰に陛下の重寄に對し甚しき過失なく茲に凱旋し戰況を伏奏するに至れるは是れ偏に陛下の御稜威と御歷代列聖の冥助とに然らしめしものにして臣等の感激措く能はざる所なり

仝戰役間に於ける本軍の作戰、給養及衛生の概要は之を別冊に具す

尙本戰役に於て臣等が能く其任務を達成し得たるは上級統帥部の等盡指導、陸海友軍の協力援助、後方勤務機關の勉勵、官民擧國一致の後援等に負ふ所のもの亦多大なりとす

茲に大命に對する任務の結了を奏聞するに當り　陛下の忠勇なる幾多將卒を戰場に喪ひ今日與に此の盛典を拜するを得ざるは臣爲楨の特に恐懼痛恨に堪へざる所なり誠恐誠惶謹て奏す

明治三十八年十二月九日

第一軍司令官男爵　黒木爲楨

陸軍大將從二位勳一等功一級　伯爵　奥保鞏

奥大將は舊小倉藩士にして弘化三年十一月を以て生る幼にして藩主小笠原侯に仕へ十二三歲の頃より漢學を修め又好んで劍槍弓馬の術を學ぶ年二十歲にして家督を襲き藩の物頭となる偶〻

長州兵の來り犯すに會し自ら藩兵の長となりて出陣し維新の豪傑高杉晉作と相對して讓らざりき明治十年西南戰爭の際は谷干城の部下となり熊本城に在り西郷隆盛の圍む所となり形勢危急に迫れり大將自ら決死隊を率て賊の圍を衝き遂に官軍と連絡を保つの策を獻し直ちに此重任に當り一大隊を率て城を出て昧爽安正橋の賊營を擊破し長驅して沿道の敵を退け竹の宮隈の庄を經て漸く宇土の官軍に達し告ぐるに城中の危急を以てし遂に官軍をして大擧熊本城を救はしめたり同二十七八年日清戰役には第五師團長として遼東の野に轉戰し田庄盞の攻陷を以て大に武名を輝せり同三十七八年日露戰役に際しては遼東半島に上陸以來南山、得利寺、大石橋、遼陽に勁敵を破り第二軍司令官として曉名一世に高し大將は粗豪なる風采に似ず深く近世戰術の學理的素養を有す沈着にして功を急がず又功名よりも實益を重んじ事に當り容易に可否を斷せず一たび斷すれば其速かなること疾風迅雷も唯ならず配下の將士大將を見ること恰も慈父の如く身高官にあるに拘はらず極めて平民的にして軍律以外に於ては部下に對し威を示さんとするが如きこと毫もなし

明治三十八年十月古城堡軍營に於て詩あり

朔北戡兵奏凱歌　揚々皇武覆人寰
露廷頑夢果醒否　暗澹雲迷烏拉山

明治三十九年一月十二日大將凱旋の節陛下より賜りたる勅語

卿第二軍を指麾し遼東半島に上陸し南山の敵を破り爾後各地の戰鬪成く偉功を奏し克く其軍の任務を遂し洵に朕が望に副へり
朕今親しく作戰の經過を聽き更に卿の勳績と將卒の忠勇を嘉尚す

復命書

同日大將の復命書左の如し

曩に詔を奉し第二軍を統率して征途に就き海軍の協力に依り敵に近き遼東の一角に上陸し直に敵の南北交通を絶ち進みて南山の壘を拔き旅順要塞をして孤立せしめ更に北して南下の敵を得利寺に邀擊し尋で大石橋の敵を擊攘して營口を占領し之より遼陽、沙河、黑溝臺、奉天の諸會戰に參與して勝を制することを得たり是上級指揮官の指導宜を得友軍の協同機に合し軍の諸機關克く其責を盡くし部下の將卒臣か命に服し死力を竭して報効の誠を致し加之忠愛なる國民の後援久うして益々熾んなりしに依ると雖も深く其由りて來る所を察すれば一として陛下御稜威の致す所に非さるはなし今や干戈の事全く歇み凱を闕下に献して天顏に咫尺することを得たり天恩優渥臣感激の至に堪す唯戰役間死沒者の臣と共に光榮ある今日に値遇する能はさるを憾むのみ謹みて別帋作戰經過の概要等數件を具し以聞す

奥保鞏

明治三十九年一月十二日

第二軍司令官 男爵 奥保鞏

陸軍大將從二位勳一等伯爵 佐久間左馬太

佐久間大將は山口藩士岡村孫七の次男にして弘化二年十月を以て山口縣阿武郡河添村に生まる舊名を直矩といひ同藩士佐久間竹之允の養子となり其姓を冒す慶應元年幕府征長の擧あるや君龜山隊の隊長となり藝州口に向ふて奮戰し賊兵を潰走せしむ後戊申の役長藩補佐長官を以て奥羽に赴き各地に轉戰奮鬪して偉功を立つ明治二年朝廷兵制を改革し諸般の兵を以て六管鎭臺を編成するに當り大將は西海鎭臺に編入せられ始めて身を軍籍に置く同五年四月陸軍大尉に任せられ幾ならずして少佐に進み同

七年佐賀の亂に十年西南の役に從軍し大に武功を立て同十一年三月臺灣に從軍し大に鎭撫の功勞あり同十五年陸軍少將に昇任し仙臺鎭臺司令官となり同十九年二月陸軍中將に進み同廿二年五月特旨を以て男爵を授けられ同二十七八年日清戰役の際は清國に進軍して連戰連捷其功顯著なるにより同廿八年八月特に子爵に陞り同廿九年五月近衛師團長に補し同年十月中部都督に補し同卅一年九月陸軍大將に任せらる同三十七八年日露戰役には特別任務の職にあり功を以て伯爵を授けらる大將性潔癖にして鬼將軍の名あり又一の名を刀痕伯といふ蓋し西南の役所屬隊長の首級を奪ひ返さんが爲め只一騎敵陣に進入し身に刀創を受くること之を合すれば殆んど五尺一寸餘に及ふ故に名つくと以て其勇を知るべし

兒玉大將は德山藩士兒玉半九郎の男にして嘉永五年閏二月を以て周防國德山に生る年十六にして官軍に從ひ長岡、會津、函館等に轉戰し僥名大に顯はる後大阪敎導大隊に入り累進して大尉となり明治七年佐賀の亂に從軍し猶闘して銃傷を負ふ創癒えて熊本鎭臺參謀に任し十年西南の役谷干城に從ふて熊本城を籠守し圍解けて日薩の野に戰ひ拔群の勳功を樹て累進して少將となる同廿五年陸軍次官に任し同二十七八年の役起るや或は大本營に赴き或は議會に列し微宵事を視る久しきに亘り多々益々辨し氣力愈壯なり勳功に依り二十八年八月男爵を授けられ金鵄勳章功三級を賜はり後陸軍大臣となる明治三十七八年日露戰役には大山滿州軍總司令官の下に總參謀長となり遼陽、沙河、奉天等の大激戰を了し膺懲の軍を率て東京に凱旋し戰功を以て伯爵を授けらる大將精悍にして犀利なると共に膽力大にして日清戰役當時の

川上將軍と相比して其好一對たる參謀本部を守り兒玉子は出て、陸軍總參謀として共に戰爭の難局に當り大器を抱て遠逝せられしは邦人の大に哀悼息まざる所なり大將の常に唱ふる所は『自强不息』に在り故に折に觸れ筆を振はんとすれば必すや此四字を書上に進らすを見る鑑し能く其性行を表はしたるものといふべし今や長男秀雄其家を襲き正五位勳六等韓國統監府事務官たり夫人をサワ子といふ

陸軍大將正三位勳一等功一級 伯爵 乃木希典

乃木大將は薩山口藩士にして嘉永二年十一月十一日を以て生る父を希次といふ漢學に長し素行又謹嚴學者として武辨者として當代に名高く實に長藩の模範者なりき而して子女の敎育唯た氣を以て激勵す寒豁古として未た十一二才の少年時代より襯衣一枚にて箱柱の立つ旦にも道場に遊ぶこと困難なる夕にも父は其子に些しも假借する所あらざりしを褌に入れて子守せしめらるゝを唯耐忍克苦の間に人となりし斯くして稽古後には必らす其妹を褌に入れて子守せしめらるゝを常とせり大將は斯く少時より耐忍克苦の美德を得且つ萩の明倫館に孜々簽雪の功を積み通れる人格は耐忍を以て最も高しとす大將は實に父君の訓戒の下に武士中の武士にてありき次で高杉晉作門下の砲隊長となり其長藩對外國てふ大腦なる仕組の下に大活劇を演じ餘波竟に小倉の討入となるや大將又之に從ひ門司を越えて田の浦口に激戰し生死一髮の途上を往來して芳名を揚けぬ時に年十八才なりきやがて王政維新となるや一時伏見の敎導隊に入り廢藩置縣後陸軍に入り明治四年少佐に任せられ名古屋鎭臺の參謀となり次で小倉の聯隊長に任せらる同八年前參議前原一誠政府に平らかならざる所あり萩に於て亂を作す大將實弟を諭して大義名分を明にし

其渦中に投することなきを以てす其至誠公に奉して一點の私なき面目髣髴として見るべし同十年西南戰爭の際は小倉聯隊長として山鹿口及ひ田原坂に奮戰し脚部に貫通創を帶ひしも馬を下りて之を摩り彈痕を拭ひ再ひ乘馬して大聲疾呼奮鬪し部下をして其壯烈に感歎措く能はざらしめたり戰功に依り中佐に進み步兵第十四聯隊長となり又第一聯隊長となる同十三年大佐に同十八年少將に任し第十一旅團長となり次で第一旅團長に任せらる同二十七八年日清戰爭には宇品を進發して華園河口に上陸し金州を陷れ大連を攻略し次で旅順攻擊の作戰成り各部の勇兵突貫して猛進し旅順口の險要一日にして陷落す更に蓋平營口を占領し休戰の詔に接し和成りて凱旋し陸軍中將に任し第二師團長に補せられ功三位勳一等に叙し男爵を授けらる同廿九年臺灣總督に任せられ同三十一年第十一師團長に補せらる同三十七八年日露戰役には第三軍々司令官として出征し三十七年六月廿六日旅

順背面の本攻擊を開始し七月卅日を以て悉く敵の防禦線を占領し夫より敵の本防禦線の攻擊に移り猛烈なる砲擊勇敢なる突擊巧妙なる對濠策等により激戰苦鬪の間に攻圍を繼續すること四箇月遂に三十八年一月二日敵將ステッセルをして開城降伏するに至らしめ茲に大名譽あり大光榮ある旅順要塞攻陷の偉業を完ふせり超えて六日乃木第三軍司令官及ひ東鄕聯合艦隊司令長官に左の勅語を賜はりたり

旅順は極東に於ける水陸の重鎭なり第三軍及ひ聯合艦隊は協同戮力久しく寒暑を冒し苦難を凌き勇戰奮鬪克く其鐵壘を奪取し堅艦を殲滅し敵をして終に城を開き降を乞ふに至らしむ朕深く爾將卒の克く其重任を全ふし偉大の功績を奏したるを嘉す

明治三十九年一月十四日大將一行凱旋の節賜はりたる勅語

鄕第三軍を指麾し堅固なる旅順要塞を攻畧し且同港に據れる

艦船を擊沈し爾後各地の戰闘克く偉功を奏し克く其軍の任務を達し洵に朕の望に副へり朕今親しく作戰の經過を聽き更に卿の勳績と將卒の忠勇を嘉尚す

當日伏奏したる復命書左の如し

復命書

臣 希典

明治三十七年五月第三軍司令官たるの大命を拜し旅順要塞の攻略に任し六月劍山を拔き七月敵の逆襲を擊退し次て其前進陣地を攻陷し鳳凰山及干大山の線に進み以て敵を本防禦線内に壓迫し我海軍の有力なる協同動作と相須ちて旅順要塞の攻圍を確實にせり八月大孤山及高崎山等を落し以て強襲を行ひ東西盤龍山の二壘を奪ひ爾後正攻を以て攻擊を續行し逐次要塞に肉薄し十一月下旬より十二月上旬に亘り二百三の高地を

占領して攻擊作業の進捗に伴ひ其正面の三永久堡壘を占領し直ちに望臺附近一帶の高地に進出し將に要塞內部に突入せんとするに當り三十八年一月一日敵將降を請ひ茲に攻城作戰の終局を告けたる時に北方に於ける彼我兩國の首力は沙河附近に相對し戰機正に熟し軍の北進を待つこと急なり因て一月中旬行進を起し二月下旬遼陽平野に集中し直ちに運動を開始して奉天附近の會戰に參與し全軍の最左翼に在りて繞圍運動を行ひ遂次敵の右翼を擊破し奉天西北方に遮進して其退路に逼り連戰十餘日尙敵を追蹤して心塞子石佛寺の線に達し一部を進めて昌圖及ひ金家屯附近を占領せしめたり

五月各軍と相絡りて金家屯康平の線を占め尋て敵騎大集圍我左側背に來襲せしも之を驅逐し茲に軍隊の整備を終り戰機の熟するを待ちしが九月中旬休戰の命を拜するに至れり

之を要するに本軍の作戰目的を達するを得たるは陛下の御稜威と上級統帥部の指導并に友軍の協力とに賴る而して作戰十六ケ月間我將卒の常に勁敵と健鬪し忠勇義烈死を視ること歸るが如く彈に斃れ劍に殪るゝもの皆陛下の萬歲を喚呼し欣然として瞑目したるは臣之を伏奏せさらんと欲するも能はす然るに斯の如き忠勇の將卒を以てして旅順の攻城には半歲の長月日を要し多大の犧牲を供し奉天附近の會戰には(此間三十字除く)又敵騎大集團の我左側背に行動するに當り之れを擊破するの好機を獲さりしは臣か終世の遺憾にして恐懼措く能はさる所なり

今や闕下に凱旋し戰況を伏奏するの寵遇を荷ひ恭しく部下將卒と共に　天恩の優渥なるを拜し顧みて戰死病沒者に此光榮を分つ能はさるを傷む爰に作戰經過概要死傷一覽表幷に給養及衛生一般等を具し謹て復命す

明治三十九年一月十四日

第三軍司令官　男爵　乃木希典

陸軍大將從二位勳一等功二級子爵故岡澤精

岡澤大將は舊山口藩士岡澤苔内の男にして弘化元年七月を以て長州萩に生る幼名を精之助といふ文久二年六月以後江戸邸に在り屢京師の間に往來して國事に盡力す同三年八月來島又兵衛と大和の義舉に趣かんとし途中其事破れたると聞き寢みぬ後藩に於て遊撃軍を編制す元治元年久坂通武等と入京應司邸に於て苦戰す後歸國して同士と共に南園隊を創立す明治元年正月諸隊と聯合し奸党を給堂に殲ひ呑水大骨等の各所に戰ひ山口に到り鴻城軍と共に佐々並の奸党を驅逐し萩に至りて藩論回復の功を奏し後石州口及ひ奥越の役小隊長及中隊長を以て各所に轉戰し本

に軍功あり同三年十月大阪第二致導隊へ入營同四年二月四等軍曹となり翌月陸軍少尉心得に同八月中尉に同十月大尉に同十一月少佐に進み御親兵五番大隊長となり同六年近衛歩兵第一大隊長に轉任し同十年西南戰爭には征討別働隊第二旅團參謀となり名古屋大阪兩鎭臺の兵を率て戰地に向ひ次で陸軍中佐に任し出征別働第一旅團參謀長を仰付られ亂平定して東京に凱旋し軍功により勳三等旭日中綬章を賜はる後第八旅團長陸軍省軍務局長陸軍次官等に歷仕し同二十七年日清戰役には大元帥陛下に供奉し廣島に進軍す翌年四月大本營を京都に移し幾もなく東京に移營さる大將常に供奉して功勞あり二十八年八月勳一等瑞寶章を賜り同月華族に列し男爵を授けらる同廿九年侍從武官長となり同三十二年八月議定官に補せらる爾來侍從武官長の職に在りしが昨秋病を得て薨去せられぬ嗣子精一氏其後を襲ぐ

川村大將は嘉永三年二月二十六日鹿兒島鄉中村に生る野崎吉兵衛の三男にして後川村新左衛門を東次郎左衛門に學ひ書を小牧昌業に習ふ文久二年八月二十一日東海道生麥に於て島津久光の英人斬殺事件起るや英艦鹿兒島灣に威嚇砲撃を試む大將時に年十四父と共に天保山に於て火繩銃を提けて英艦を目がけて發砲せり英人薩摩隼人の剛勇に遑易し和を申込み事落着に及ひぬ元治慶應の交脅皇佐幕の論天下に沸騰するに當り大將年十七を以て京都守護を命せられ佐幕党の壯士團隊たる新撰組の跋扈を抑へ人をして其膽勇に服せしめたり戊辰の役東征の軍に參與して奥羽の間に轉戰して偉功を奏し賞祿八石を賜はる明治三年歩兵少隊小頭となり同五年少尉に進み六年中尉に陞進し七年大尉に累進す同十年西南戰爭には征討第三旅團に屬し大隊長心得を以て出陣せり山鹿口の戰尤も努む

賊軍城山に立籠むるに當り第三旅團二之丸口の指揮官として絶壁を攀ちて敵の防禦物を破壞し一齊に吶喊を試み之を占領して城山陷落を速かならしめたり戰功を以て勳四等に叙せられ年金百三十五圓を下賜せらる同十五年中佐に進み同十八年大佐に陞進し同二十四年陸軍少將に累進し歩兵第八旅團長に補せられ同二十七年近衛歩兵第一旅團長に轉す同二十七八年戰役には臺灣征討に前衛司令官となり頂双溪及ひ三貂大嶺の間に轉戰して敵兵を掃蕩し北白川宮殿下の命を奉して基隆攻擊の任に當り更に庄口臺北府を經て淡水港を占領し次て苗栗、彰化、打狗を平け臺南府を陷落し全島平定の後ち東京に凱旋し特旨を以て華族に列せられ特に男爵を授けられ功三級に叙し年金七百圓下賜せらる同三十七年春日露戰端を開くや第十師團長として出征し大孤山の一角に上陸し獨立上陸軍の名稱の下に深く敵地に進入し分水嶺柝木城に戰ひ遼陽沙河の會戰了るや中將より大將に昇進し鴨綠

[illegible]り大將風手雄偉度量海の如く果決英斷溫乎たる其言は能く衆心を歸服し嚴然たる其威は能く百萬の敵を恐怖せしむるに足る眞に良將といふべし

陸軍大將從二位大勳位功三級 侯爵 桂太郎

桂大將は山口藩士桂與一右衛門の長男にして弘化四年十一月を以て生まる明治戊辰の歳長藩第四大隊中隊長として奥羽鎭撫の爲め總督に從ひ東北各地に奮鬪勇戰して遂に平定の功を奏し總督府より金三兩及びピストルを下賜せられ凱旋の日御大刀料として金百兩を賜ひ翌二年其軍功を賞せられ尙藩主より十五年間金三拾兩を賞與せらる同三年三月獨逸に遊學し兵學の蘊奥を究めて同六年十一月歸朝す同七年一月陸軍に出身し大尉となり同

八年三月亦歐州に航行し獨墺等の兵備を講究視察し同十五年五月歸朝す同年八月太政官少書記官を兼任し次で同權大書記官となり同十八年五月陸軍少將に昇任し同十九年三月陸軍次官となり同二十三年六月第三師團長に補せられ同廿七八年戰役には鴨綠江、海城、田庄臺等の各所に勇戰し大に武威を海外に輝せり後戰功を以て子爵を授けられ同廿九年六月亞海總督となり同卅一年一月陸軍大臣となる同卅七八年日露戰役には內閣總理大臣として陸下補佐の任に勤めポーツマス條約の結果兩國の媾和成立するや其功勞により侯爵を授けらる後西園寺內閣成立と共に軍事參議官として其樞務に當られしも同四十一年再び內閣總理大臣となり西園寺內閣に代り大藏大臣を兼攝して軍事費に削減を加へ無事に議會の協贊を經たり大將は單に劍を以て立つ武人のみに非ずして經世家として大に其手腕を試みんとするの人なり眞に智勇兼備の良將といふべし

陸軍大將從二位勳一等功一級子爵　長谷川好道

長谷川大將は山口縣岩國の藩士にして嘉永三年八月二十六日を以て生る父を藤次郎と稱し武術に長し藩侯の師範役たり資性剛直藩儒東崇一の門に入り陽明學を研究して大に悟る所あり時に幕府倒れて王政復古となるや藩主の精義隊を率ひ上京するに際し大將は當時陸軍伍長として從軍し王師に從ひ東征し相馬藩の兵と戰て功あり勳旌の後拔擢せられて小隊長となる時に年齡僅かに二十に過ぎざりき明治三年大坂兵學校に入り翌四年十二月陸軍大尉に昇進し西南の役には少佐を以て出征せり同十六年十一月大佐となり同十九年十二月少將に任せらる同二十七八年戰役には九州の健兒を率て第二軍混成旅團長となり韓國仁川に上陸し盛京省花園口を經て山地第一師團長の軍に合し金州を拔き旅順を陷れ大に我軍の威武を輝せり兩國和議成るの後功を以て

金鵄勳章功三級に叙せられ特に男爵を授けらる同二十九年六月中將に進み同三十七八年の役日露の平和破るゝや近衛師團長として黒木軍に屬して出征の途に就けり鴨綠江九連城に奮戰し終に之を斃潰して腰滿、馬滿、楡樹溝一帶の高地を占領して雷名を轟かせり大將軀幹長大にして容貌魁偉一見精悍の氣象其眉宇に顯はるゝ又事を處するに明敏にして且つ勤勉なり其近衛師團長在職中も勵精一日も怠らず能く幕僚を統率し兵士を慰撫し特に意を軍隊の敎育に用ひたり今日近衛師團の範を全國に垂るゝ大將の功蓋し鮮しとせず

陸軍大將正三位勳一等功一級子爵 西 寛二郎

西大將は弘化三年三月十日を以て薩摩國鹿兒島郡上荒田村に生まる父は太郎兵衛と稱し兄弟五人あり大將は其長男なり十七歲の時藩侯に從ひ京都に出でたるが當時尊王討幕の論大に沸騰し天下騷然たり大將感ずる所ありて君側を辭して一兵卒となり隊伍に加はりたるが幾干もなくして遊擊隊の一部隊長に拔擢せられたり後兵を率て再び京都に出でて伏見鳥羽の戰に功あり東北征討の際には北陸道の先鋒となり越後奥羽の間に轉戰して曉名を馳せ明治四年七月陸軍中尉に任せられ御親兵二番大隊一番小隊長となり同年十二月大尉に進む同七年佐賀の亂起るや少佐として征討軍の參謀となり又十年の西南戰爭には第一旅團參謀として肥薩の間に轉戰し負傷するも更に屈せず進んで日隅の境に舊圍して功あり亂平ぐに及び功を以て勳四等に叙せられ同十二年三月中佐に任じ同十五年大佐となり東京鎭臺參謀長參謀本部第一局長第一旅團司令部を經て同二十二年八月少將となる同廿七八年日清戰爭の際は山地將軍の部下に屬し清國花園口に上陸し金州旅順大平山の諸戰に功あり平和克復の後金鵄勳章功三級に叙せ

られ特に男爵を賜はりぬ同三十七八年日露戦争起るや東北北越の兵士を率て黒木軍の下に属し征途に就き第二師團長として鴨緑江の大戦には軍の左翼となり奮戦苦闘他師團に卒先して鴨河を徒渉し頑強に抵抗せる九連城正面の敵を撃退し破竹の勢を以て遂に安東縣を陥れたり

将軍日露戦争中鴨緑江の戦に際し咏める

鎖されし堅き關の戸打破り
屍の中に駒勇むなり

陸軍大将従二位勲一等功一級子爵 小川又次

小川大将は舊小倉藩士にして嘉永元年七月を以て生る少時江戸に来り彼の有名なる洋式兵術家江川太郎左衛門の門に入り熱心に兵術を究むること三年後小倉藩一方の長となりて長州兵と戦ふ是大将が軍人生活の序幕なり明治五年中尉に任じ六年大尉に進み次で臺湾征討には幕僚として戦功あり神風連の亂及西南戦争の際は官軍の勇将として力戦し殊に西南の役には身に二弾を被りしも毫も屈せず安政橋の賊軍を撃壊し以て奥大将の軍を援助したりしが如き尤も人口に膾炙する所なり明治廿七八年日清戦役の際は第一軍の參謀長として出征し平壌以北一切の作戦計劃を以て奏功着々として毫も違算なかりしは普く人の知る所なり明治三十七八年日露の役には第四師團長として金州第一の嶮要南山を陥れ更に疾風迅雷の勢を以て猛進し遂に遼陽を抜けり然れども此戦に於て将軍左翼軍に在り戦況を視察せしが敵弾の為めに負傷し鮮血戎衣を濡ふすも擔架を退けて兵を指揮せしが如き其苦戦の狀歴々たるものあり後戦功を以て男爵より子爵に進み今や閑散の身となれり大将容貌魁偉音聲破鐘の如し嘗て我陸軍が軍政改革の擧あるや世界に雷名を轟したる戦術家劉邁

のメッケル少佐を聘して我敎官たらしむ將軍當時尉官として參謀本部にあり諸將と共に少佐の講話を聽き大に造詣する所あり其用兵の法拔群だりしを以て山照元帥に知られ爾來累進して今日の位置に至れり

陸軍大將正三位勳一等功一級子爵　寺內正毅

寺內大將は舊山口藩士亡宇多田庄兵衞の二男にして嘉永五年二月を以て生る安政六年十二月同藩士寺內勘右衞門の養子となり明治四年三月家督を相續せり同年陸軍少尉に任じ同七年陸軍戶山學校を卒業し同十年の役には各所に轉戰して負傷す同十二年歩兵少佐に昇任し同十五年佛國に留學を命せられ同廿七八年日清戰役には第二軍に從て出征し功あり功三級金鵄勳章を賜はり同三十年陸軍中將に陞叙せらる同三十三年清國に差遣せらる其間陸軍士官學校大隊司令官、陸軍大臣秘書官、陸軍戶山學校次長、陸軍士官學校長、第一師團參謀長、參謀本部第一局長、敎育總監部長、參謀本部次長、陸軍大學校長等に歷任せり同三十五年入閣して陸軍大臣となり同三十七八年日露戰役の功に依り同四十年九月特に華族に列せられ子爵を授けらる

陸軍大將正三位勳一等功二級子爵　故立見尙文

立見將軍は舊桑名の藩士町田誠臥翁の三男にして弘化二年七月を以て生る幼名を鐘三郎といへり幼にして同藩立見氏に養はれ其女操子を妻とす維新の際桑名藩は佐幕の盟主として薩長に反抗せしを以て將軍二十三歲の青年ながら藩の一隊を率ひ宇都宮より大鳥圭介の軍に合し各所に轉戰せり亂後東京に出て沼間守一の管せる嚶鳴社に入り苦學連年終に文官たらんとの念を起し

たれど其意に適せず明治十年の亂に際し再び身を軍籍に置き鎭臺兵參謀長を以て日隅の間に戰ひ十一年大阪鎭臺の大隊長に累進せり同十七年二月陸軍中佐に任し步兵第一聯隊長となり同二十年大佐に進み同二十二年三月第三師團參謀長となり同九月近衛師團參謀長に轉じ同二十七年六月陸軍少將に任じ步兵第十旅團長に補せられ日清戰役に從軍し平壤、鴨綠江、虎山、附近九連城、分山路子、鳳凰城、焚家臺、大孤山、金州等に轉戰し大に武名を輝したり二十八年五月凱旋し勳功を以て男爵を授けられ二十九年四月臺灣總督府軍務局長となり三十一年三月陸軍中將に任じ第八師團長となる三十七八年戰役に際しては多くの師團に遲れて出征し沙河の役後露軍は風雪を利用して長灘方面より渾河を渡り直ちに我左翼を衝かんと欲し沈旦堡黑溝臺方面へと集中し來るに會す將軍此一帶の地點を據守し勇敢之に當り敵の七個師團砲三百門に對し我は一個師團の寡兵を以て之を迎へ唯に潰敗の否運を

支へ得たるのみならず三面包圍の內にありながら除ろに其友軍の來り援くるを侍ち竟に力を併せて敵の大軍を渾河の右岸に壓迫したり何等の偉觀ぞ吾人は當時歐州新來の敵の第二軍を擊破し盡したる將軍の颯爽たる風姿を想望し馬を雪中に立てたる其勇氣に驚かざるを得ず

陸軍大將從三位勳一等功二級 子爵 大島久直

大島大將は舊秋田藩士大島源治の四男にして嘉永元年九月を以て生まる幼にして江戸に出て軍人たらんとするの念切なりしかば兵卒と伍し操練に從事し熱心瘁勵の結果明治四年五月陸軍中尉に任し同年十一月大尉に進み同七年少佐となり同十年西南の役起るや第四師團に編入せられ其年四月熊本城に入り更に第一旅團の麾下に屬し九州各地に轉戰し頗る勳功あり同十四年二月

中佐に進み總務局次長となり後累進して同廿五年陸軍少將に任じ歩兵第五旅團長となり同廿七八年日清の役には仁川に上陸夫より滿洲の野に進軍し柵木城附近の戰に續て海城紅瓦寨沙河園乾泉堡牛莊及田庄臺其他の各地に轉戰して武名を揚げ次で征清大總督府の命により同廿八年五月旅順口に着し更に樺山總督に從ひ臺灣に赴き陸軍局長の職を奉じ近衛師團を三貂角に上せしめ敵を驅逐し進んで海陸より基隆を挾擊して之を陷れ續て臺北に入り臺灣總督府參謀長となり遂に臺南に入り平定の功を奏し軍功を以て男爵を授けらる同三十年四月陸軍大學校長に補し三十一年十月中將に任じ第九師團長に補せらる同三十七八年日露の役には同師團の兵を率て出征し旅順其他に轉戰し勳功を以て子爵を授けらる

陸軍大將正三位勳一等功一級子爵 大島義昌

大島大將は舊山口藩士大島慶三郎の長男にして嘉永三年八月を以て長州大津郡河原村に生る維新の際伏見鳥羽に從ひ後奥羽に轉戰して功あり明治三年四月大阪青年學校に入り翌四年八月卒業して陸軍少尉心得となり後累進して少佐となる同十年西南の役には歩兵第八聯隊第一大隊長として第三旅團の部下に屬し豪膽果敢を以て顯る後仙臺鎭臺に奉職し又中部監軍參謀に補せられ尋て第一師團參謀長となり士官學校長を兼ね更に近衛聯隊長に進み同廿五年陸軍少將に陞り歩兵第九旅團長に補せられ同廿七年朝鮮に東學黨の亂起り淸國兵を派するの報あるや混成旅團の兵を率て渡韓し我公使館及び領事館と居留民とを保護し大鳥公使を助けて其外交を振はしむ將軍韓廷の睹に依り在牙山の淸兵を掃蕩し更に進んで成歡に淸將葉士超、聶士成、の率たる三千

の清兵を粉砕し尋て平壤を破り進んで鴨綠江及九連城の敵を攻撃し夫より鳳凰城龍頭塞三家子塔子嶺牛莊田庄臺等に戰て偉功を奏し男爵を授けらる同三十一年二月陸軍中將に任じ第三師團長に補せらる同三十七八年戰役には奥軍の部下に屬し各地に轉戰し後關東都督となりて旅順に駐在し我邦の重鎭として重んせらる將軍常に兵を說く必ずや曰く「知彼知己百戰百勝」と蓋し金言といふべし

陸軍大將正三位勳一等功二級 子爵 大迫尙敏

大迫大將は薩摩鹿兒島藩士大迫新藏の長男にして弘化元年十一月を以て生る幼時藩の造士館及演武館に於て文武の業を學ぶ文久三年生麥事件起り英艦城下へ來舶するや五番組の兵士にて從軍

五番隊斥候の任を以て城州鳥羽街道を警戒し慕兵の先鋒と開戰し次で岩倉總督に屬し中山道より上野總の間に涉り猶奥州白河より會津に至り各所に勇戰して平定の功を奏す明治四年七月陸軍中尉に任じ翌十年西南の役起るや亦從軍して肥豐薩隅日諸州に轉戰し遂に城山を陷るに至る交戰中少佐に進み凱旋の後勳四等に敘せらる同十八年二月近衛步兵第一聯隊長に同廿三年十月第四師團參謀長に同廿五年九月步兵第五旅團長に補せられ陸軍少將に進む同廿七八年日清の役亦從軍して朝鮮元山津より清國盛京省に涉り各地に勇闘して武名を揚ぐ同廿八年五月凱旋して功三級金鵄勳章を賜ひ華族に列し男爵を授けらる同三十七八年戰役には第七師團長として出征し旅順攻擊に參加し二〇三高地占領に就ては大に偉功を奏せり將軍常に部下を愛し若し部下に過失あれば嚴しく戒飾を加ふと雖も必ず自ら責

を引て部下に負はしむることを爲さず其言に曰く予は眼光の及はざる所に決して兵を動さすと故に其一たび意を決するや部下全滅に至るとも更に顧る所なけれど事後の好果を喜ふと共に旅順攻擊に際しては部下損害の多きを思ひ嗚咽堪へざりしといふ

陸軍大將從三位勳一等功二級　男爵　井上光

井上大將名は光嘉永四年十一月八日を以て山口縣玖阿郡下錦見村に生まる明治四年九月に陸軍大尉を以て御親兵七番大隊小隊長となり同年九月廣島鎭臺步兵第十二聯隊第三大隊長心得となり同七年少佐に任せらる西南の役高島將軍の勸めにより別働隊を編成して大隊長となり肥薩の間に轉戰し功あり同十六年二月西部監軍部參謀に補せられ同十八年五月中佐に進み步兵聯隊長となる同二十一年十一月大佐に任じ翌年九月第三師團參謀長に

補せらる同二十七年二月軍事視察として[illegible]差遣せられ途中より日清戰端を交へたるを以て歸朝を命せられ直ちに出征し戰爭中少將に進み媾和成るの後功を以て金鵄勳章功三級に敍せられ同三十二年中將に任せらる同三十七八年日露の役には九州の健兒を率て征露軍の先鋒となり韓國仁川に上陸して先づ敵の機先を制し陸路京城より平壤に入り鴨綠江の總攻擊には水口鎭を渡河し靉河を橫りて石城の兵を掃攘して敵の左側に出で勇進追擊して敵を蛤蟆塘に粉碎し我軍の武名を世界に輝したり將軍資性敏捷機智に富み武藝を好み又詩書に心を傾け古今成敗治亂の跡を極む錦水は其號なり今左に三十七年冬營中の作を揭げん

公戎何處決雌雄　百戰未酬一簣功　白日空徂沙水暮
朝鮮岑上月如弓

○海軍大將

海軍大將從二位勳一等功二級　子爵　井上良馨

井上大將は薩摩鹿兒島藩士井上七郎の長男にして弘化二年十一月を以て生る戊辰の八月初めて春日艦に乘組み官軍の應援として東北各港に出張し尋て函館に進擊し大に軍功あり明治八年雲揚艦長として海底測量の爲め朝鮮海に出で江華島に於て彼暴徒我艦に發砲す大將大に其不法を憤り上陸奮擊して永宗城を陷る後歐州諸國及び淸國等に航海し各地の地理形勢風俗等を視察して大に得る所あり同二十年勳功に依り男爵を授けらる翌年海軍大學校長となり同廿五年海軍中將に昇進し同廿七八年の戰役には常備艦隊司令長官として勳功あり平定後旭日重光章及年金五百圓を賜ふ同廿九年二月吳鎭守府司令長官に同三十二年五月橫須賀鎭守府司令長官に補せられ日露戰役後其功績顯著なるを以て子爵を授けらる

伊東大將は薩摩鹿兒島藩士伊東祐典の四男にして祐麿氏の弟なり天保十四年五月を以て生る．文久二年英艦鹿兒島を砲擊せしより將軍深く海軍の必要を感じ將來身を以て海軍に委せんと決心し奮然志を立てゝ薩藩の英學校なる開成所に入り日夜學業に勵め後米國に遊學し大に得る所あり函館開戰は蓋し其技倆を試むるの最初なり明治四年海軍大尉に任し爾來昇進して同廿五年十二月海軍中將に進む同廿七年八月我國淸國に向て膺懲の軍を起すや將軍聯合艦隊司令官として旗艦松島に在り同年九月山縣陸軍大將の一行を護送して仁川に至り更に轉じて大同江沖に進み我陸軍の平壤を攻擊するに及び遙に聲援を與へしめ且つ敵の海軍が襲來するに備ふ其月十七日淸國北洋艦隊の精銳十二隻と黃海に相逢ふ激戰半日擊て之を破り敵の堅艦來遠、超勇、揚威、致遠、廣甲の五隻を擊沈し定遠、鎭遠の二大艦以下に非常の損害を與へた

り翌二十八年一月我海陸軍並び進んで威海衛を攻むるに當り敵の北洋艦隊は黄海の敗に懲り威海衛に潜んで出でず將軍乃ち艦隊の一部をして我陸兵を護送せしめ更に進んで威海衛を封鎖し書を敵將丁汝昌に贈りて其の降りを勸む彼公義を重ずるを名とし聽かず遂に連攻連日二月五日水雷艇をして敵の旗艦定遠以下を擊沈せしめ十一日丁汝昌使を遣して降を請ひ其軍艦砲臺兵器彈藥を我に致して自殺す將軍鎭遠以下の敵艦を收容し更に其一艦の武裝を解きて彼に與へ以て丁汝昌の遺骸を送しむ此に於て敵の北洋艦隊全く滅ぶ　天皇陛下深く其功を賞し勅語を賜ふ戰終りて戰況の概略を奏上し重ねて優渥なる勅語を賜はる同年八月勳功に依り子爵を授けられ同卅一年四月海軍大將に任せらる同卅七八年日露戰役の際は海軍々令部長として其職に在り以て曩古の海戰をして全からしむ將功を以て伯爵に陞授せらる

海軍大將正三位大勳位功一級伯爵　東鄕平八郎

東鄕海軍大將は弘化壬年十二月を以て薩摩國鹿兒島加治屋町の邸に生る祖先以來島津家の藩士にして祿百石を受け父を吉左衛門と稱し溫厚篤實の君子人なりき曾て藩の郡奉行を勤め十三年の久に涉れり母堂を益子といひ風姿他に優れて溫順貞淑の婦德を備へ氣象雄々しく剛毅なる武士氣質を有し禮節に嫻ひ萬事に細心にして家計は質素を旨とし殊に小兒を敎育することに頗る嚴格にして文武の道を研修せしむるに些の寸閑なく書籍の溫習を終れば直ちに擊劍の獨り稽古を勸め始終激勵の訓言を與へられたり大將は十二三歲より十五六歲までは漢籍を學び或は水泳を試み擊劍の稽古を爲し或は相撲を取りて遊ふを常としたり文久三年六月英艦七隻鹿兒島平川村の濱に迫る薩藩彼れの要求を峻拒するや英艦開戰の準備を爲し次で七月二日櫻島附近に於て砲戰は開始せられ英艦の武器精巧なるを

以てして猶薩藩諸士の元氣旺盛なるに敵し得ず遂に退却するに至れり當時東鄉大將十七歲の少年たれども海軍練習生に拔擢せられ居たれば此戰に參加して大に其膽力を練り實戰の經驗上得る處尠からざりき明治元年鳥羽伏見の戰爭に於て幕府の軍勢敗走し王政維新の端緒を開きしが大將年二十二薩藩の軍艦春日丸に乘組むへき命を受けて兵庫に急行し正月三日の朝運送船二艘を先とし鳳瑞春日の二艦之を援護して神戸を出帆し朝霧を犯して瀨戶內海を進航し阿波の伊島沖に至るや偶幕府の軍艦開陽と會して茲に海戰は開かれたり當時敵艦は幕府海軍の最老手榎本釜次郎指揮官たり味方にては赤塚源六を艦長として現海軍大將伊東祐亨の令兄祐麿等乘組み居りしが砲戰數時春日大に優勢を示したり翌二年榎本等が幕府の軍艦を率て函館に據るや大將又追擊の艦隊に加はりて春日に在り桑ケ崎の海戰及び函館攻擊に際し大將尚若年の士官ながら奮戰激鬪最も努めたりしが敵艦朝陽艦沈の一刹那味方なる第二丁卯艦は其勢の凄烈なるに恐れ後方に退き逃げんとするを見るより士官東鄉は春日の舷頭にあり て怒氣滿面第二丁卯を睨み付けつゝ「此卑怯者めがッ」と大喝しだりといふ此事は東鄉の「軍艦叱咤」として當時官軍中に有名なりしと

明治四年三月英國留學の途に上りプレモウス軍港にて傳習艦に入り海軍に關する學術を研究し同九年四月留學の期滿ちて歸朝せんとするに際し我政府英國に托し軍艦比叡を製造するの擧あり之が監督の命を奉じ同十一年一月同艦竣工し之に乘組み回航の途に就き五月歸朝したり同七月海軍中尉に任じ扶桑艦に轉乘し其十二月大尉に昇進す同十二年十二月少佐に昇る同十三年一月迅鯨副長となり從六位に敘せらる同十四年十二月天城副長に轉任し同十六年三月第二丁卯艦長に補せられ同十七年天城艦長に轉じ清韓沿岸を巡航す同十八年六月中佐に進み主船局出勤を命せられ同二十三年五月大佐に進み從五位に敘し吳鎭守府參謀

長に轉す同二十四年浪速艦長となり同二十五年二月隣邦の各港海巡航視察を命せられ同二十六年二月布哇に航し五月歸朝して勳五等瑞寶章を賜はる同八月浦塩斯德及び北海道の沿岸を巡航して十一月品川に歸り同二十七年四月吳鎭守府海兵團長となり六月再び浪速艦長に補せられ常備艦隊として韓國沿岸航行を命せらる

明治廿七八年戰役の際司令長官海軍少將坪井航三は第一遊擊艦隊として浪速、高千穗、吉野、秋津洲の四隻を率て淸國が大沽より陸兵を牙山に送るの航路を遮斷せんとす敵の陸兵及び軍需品を搭載せる高陸號及ひ之を護衛せる軍艦操江は彼我艦隊の戰況を認め倉皇航路を轉じて逃走せんとす大將は當時浪速艦長として高陸號に迫り空砲二發「直に止れ」の信號を爲し之を臨檢せしむ船長ガルスウオーヂーは快く承諾したるも淸國士官は之を拒み尙浪速に隨行の命を聽かざりしかば遂に之を擊沈し淸國陸兵輸送の計劃をして全く失敗に了らしめたり大島混成旅團が成歡に牙山に淸兵を破れるもの高陸號を擊沈せる大將の功與りて大なりといふべし同三十七八年日露の役には大將聯合艦隊司令長官として三笠に坐乘し旅順陷落の際は丹後(ボルタワ)肥前(レトウキサン)周防(ボベーター)阿蘇(バーヤン)津輕(バルラダ)相摸(ベレスウエート)等の敵艦を收め更に日本海々戰には敵將ロヂエストエンスキー(アリヨール)沖ノ島(アブラキシン)を生擒し壹岐(ニコライ一世)石見(アリヨール)見島(セニヤウイン)等を捕獲し古今未曾有の大捷を得て凱旋せり

大將の海戰經過の奉告に對せられ左の勅語を賜りたり

朕カ統督スル聯合艦隊ノ能ク萬難ヲ排シテ空前ノ偉功ヲ奏シタルハ中外ノ齊シク膽望スル所ナリ

朕今卿ヨリ親シク其戰況ヲ聽キ將卒ノ忠烈ヲ懷フコト更ニ深シ卿等其レ自愛セヨ

東鄕大將一行は明治三十八年十月二十二日東京に凱旋聖上東宮

御使を新橋驛に派遣す其他文武官市民大衆の歡迎を受け萬歲聲裏に直に宮中に參內し千種の間に於て聖上東宮に拜謁し左の經過を奉告せり

奉告

客歲二月上旬聯合艦隊が大命を奉じて出征したる以來玆に一年有半其間海陸の交戰皇軍勝利を得ざることなく今日復たび和平の秋に遇ひ臣等犬馬の勞を了へて大濡の下に凱旋するを得たり是れ一つに大元帥陛下御威德の然らしむるものにして臣等の終始感激措く能はざる所なり

初め聯合艦隊の海上に第一期作戰を開始するや臣は大命に基き海陸の形勢と陸戰の方向を考案し敵艦隊の主力を旅順方面に拘束し之をして浦塩の要地に據らしめざるを以て戰略の主眼とし先づ旅順仁川に敵を迅擊し更に敵次の攻擊を重ねて

漸次に其勢力を減殺し又屢々冒險なる敵港の閉塞及敵前の水雷沈置等を試み以て敵の出動範圍を縮少するに力め尙麾下艦隊の一部を常に朝鮮海峽に駐めて海上の要害を扼し以て浦塩の敵を監視すると同時に旅順の敵に對する第二戰線たらしめたり此作戰の前期中敵は終始地利に據りて退嬰を事とし我軍連續の攻擊も容易に其成果を收むる能はざりしが八月中旬敵艦隊主力の旅順より浦塩に逃れんとするに及て黃海竝山沖の海戰を見るに至り期せずして全く敵の戰略企圖を摧破し我作戰目的の過半を達成するを得たり其後陸戰漸く步を進め旅順の背面に對する我攻圍軍不撓の追擊は海上に於ける耐久の封鎖と相須て遂に敵艦隊の主力を其要塞の下に殘滅するに到れり惟ふに此期の作戰は戰勢の自然に伴ひて漸進微功を積み攻戰約十ケ月に亘り我將卒の心力を傾注し智勇を發揮したること本戰役中に冠絕し忠死の士殉難の艦又少からざりしと雖も

戰局の大勢は茲に初て定り爾後日本海に於ける決勝の機運も此間に萠芽したるを覺ふ

今春年改まると共に第二期の作戰に移り我艦隊は更に兵力を整頓して敵の第二艦隊に備へ傍ら露領沿海州を包鎖して敵國軍資の輸入を遮斷し時に支隊を南洋に分遣して敵の航通を威嚇するに勉め其間對馬津輕宗谷國後等の諸水道附近に於て捕獲したる船舶三十餘隻を算す初夏五月に入り敵の第二艦隊近海に出現するに及び豫めて我全力を朝鮮海峽に集中し逸を以て勞に乘するの策を執りしが我將卒の勇敢なる動作は神明の加護に由り著々其功を奏し日本海々戰の一擧敵影を海上より掃蕩し以て此期の作戰を終結するを得たり

爾來海洋は名實共に我艦隊の制壓に歸し作戰第三期に入りしも負擔の任務は大に輕減し或は陸軍と共に樺太の攻略に從軍し殆ど一兵を損せすして協同の任務を果し或は時々北韓方面に作動して敵を脅威し且つ依然露領の包鎖を續行して休戰復和の終局に至る迄確實に之を維持せり

之を要するに聯合艦隊の作戰は其第一期に於て戰勢を定め第二期に移りて戰勝を決し第三期に入りて戰果を收めんとしたるものにして其間緩急難易の差異ありしと雖も全局に亘る一貫の攻戰は其始より順當に經過し終に今日あるを見るに到れり今や凱旋して東京灣に集合する帝國艦船大小百七十餘隻固より戰役に亡失したるもののありと雖も更に戰利として獲得したるものを加へ倘能く戰前に劣らさる武力を保有するを得たるは臣等の喊に光榮とする所なり終りに臨み臣は聯合艦隊は滿韓に於ける陸戰の效果に依り其餘利を蒙りたること少からす又海軍大小機關の整備活動其他諸官衙の支助協力に依り海上の作戰遂に無く進捗したるを感喜す茲に謹て海上作戰の經過を奉告し大命に對する責務の結了を奏聞す

二

明治三十八年十月二十二日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

海軍大將從二位勳一等功一級　伯爵　山本權兵衛

山本大將は鹿兒島藩士にして父を五百介といふ御家流の書道に巧みなりしを以て御祐筆たりし事あり大將は其長男にして幼より老西郷に師事し戊辰の役には年齡僅かに十六歲にして薩軍に從ひ越後口に轉戰し平定後鄉に歸りて依然老西郷の薰陶を受け居たるが二十歲志を立てゝ上京し海軍兵學校に入學し明治七年業を卒へたり

明治十年西南の役起るや老師に酬るは此時と上村中將と共に私かに海軍を脫して薩軍に投じたるに老西郷は非常に立腹し汝等は將來帝國海軍の重鎭を以て任する者輕卒に我軍に投したるは

不心得の甚しきものなり我等の此擧に出でたるは萬已むを得ざる事情の存するものにして而かも錦旗に抗すれば所詮は賊軍たして其運命の窮する所知る可きのみ汝等有爲の青年國家の爲め敢て其前途を誤る勿れと懇々訓誨する所あり川村伯に宛てたる書面を持たしめて二人を送還せり老西郷の書簡を受取りたる伯も大に其意を諒とし二人の脫走を許し軍艦筑波に乘組ましめて軍に從はしめたり然るに恩師に弓を引くは情に於て忍びずとなし再三之を辭したるも川村伯の私情の爲めに公事を拋つは男兒の爲すべき所にあらず予も先輩として畏友として衷心忍び難きものあるも公私を混同するは能はずとて訓戒する所あり其切なる情に動されて大將も遂に涙を振ひて軍に從ひたりといふ此一事偶以て大西郷及び川村伯等に其偉才を認識せられたるを証するに餘りありといふべし次で明治十八年浪速回航員として英國に差遣せられ少佐に進み同二十年海軍傳令使となり樺山海軍次官

に從ひ殿米に差遣せられ同三十一年海軍中將に昇進して海軍大臣に親補せらる其間高雄艦長海軍大臣官房主事海軍省軍務局長等に歷任せり日露戰役中は海軍大臣として功勞尠からす功一級金鵄勳章旭日大綬章を賜はる後本官を辭して軍事參議官に任じ同四十年九月伯爵を授けらる

海軍大將從二位勳一等功二級　男爵　柴山矢八

柴山大將は舊鹿兒島藩士父を良庵といふ將軍は其二男なり嘉永四年七月を以て生る明治七年海軍中尉に任し同八年正七位に叙せらる次で水雷局長橫須賀鎭守府參謀長海門高千穗艦長海軍兵學校長常備艦隊司令長官となり其功績少からず爲めに勳一等功二級に叙し特に華族に列せられ男爵を授けらる

海軍大將從二位勳一等功二級　男爵　鮫島員規

鮫島大將は鹿兒島縣士族亡新左衛門の長男にして弘化元年五月を以て生る明治五年家督を相續す同五年海軍少尉に任し同八年從七位に叙せらる爾來榮進して海軍參謀本部第二局長扶桑艦長橫須賀鎭守府參謀長西海艦司令官常備艦隊司令長官海軍大學校長橫須賀鎭守府司令長官等の要職に在り同二十七八年日清戰役には功三級同三十七八年日露戰役には功二級金鵄勳章を賜はり同四十年九月華族に列し男爵を授けらる現時隼備役仰せ付けらる

○陸軍中將

陸軍中將　男爵　松村務本

松村將軍は加賀國前田氏の藩士にして父は三百石を食みたり戊

辰の役將軍年齡僅かに十六老西鄉の德を慕ふて其下に加はり斥候として殊勳あり偶々京都の役其股を狙撃せられ隻脚の自由を失ふこと久しかりき後野津大將に拔擢せられて大尉となり西南の役には田原坂の激戰に左腕を負傷し出血夥しきにも拘はらず益々奮闘して敵軍を破りぬ明治二十七八年日淸戰役には黑木軍に從ふて參謀長となり同三十年臺灣戰爭を經て少將となる伏見宮戰地より御歸還あらせらるゝに及び其後を承けて中將に陞任し同三十七八年日露戰役には旅順攻圍軍右翼縱隊として奮戰し難攻不落と稱せられたる天嶮松樹山攻撃を一身に負ひ以て偉功を奏せり將軍容貌魁偉頗る老西鄉の風あり性洒落活達善く飮み善く談し時としては愛矯滴るが如きも一旦戰陣に臨まば威風堂々近くべからざるものありしといふ嗣子務氏家を襲ぐ

陸軍中將從三位勳一等功二級　男爵　大久保春野

大久保中將は靜岡縣の人忠尙の長男にして弘化三年八月を以て生る明治三年陸軍幼年學校に入り後佛國留學を命せられ爾來身を軍籍に委ね陸軍戶山學校長、陸軍士官學校長、第二師團參謀長歩兵第七旅團長敎育總監部參謀長等に歷補せられ明治三十七八年日露戰役には第六師團長として出征し專ら遼陽正面の攻撃に當り大久保縱隊の名聲大に振ふ同四十年九月勳功に依り華族に列し男爵を授けらる現に第三師團長たり

陸軍中將從三位勳一等功二級　男爵　上田有澤

上田中將は嘉永三年二月十四日を以て德島の城下に生まる父は吉之丞といひ蜂須賀侯の馬術師範役たり年少にして藩立長久學館に入り夙に文武に熟達し名聲大に振ふ藩侯其才幹を愛して特に祿三百石を賞賜し二等格に列せしめぬ明治元年藩主蜂須賀茂

昭に從ひ橫濱の守備に任し與羽平定の後歸藩す同二年銃士六番大隊司令官となり更に三大隊司令に轉じ同四年陸軍大尉心得と受け出張中偶〻前原一誠不平黨を糺合して叛旗を萩に擧ぐるに會し急に歸隊を命せられ其歲十一月一日を以て廣島鎭臺歩兵第十一聯隊中隊長として兵を率ゐ道を山陰道に取り石州口より萩の城下に攻入りて賊徒を平定し凱歌を揚して廣島に歸る同十年西南戰爭には歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊長を以て馬關の警備に任じ後田原坂の激戰に參加して負傷す功を以て勳五等に叙せられ金百圓を賜はる同十四年少佐に進み二十二年中佐に陞進し同二十六年大佐に任せられ同二十七年には勳三等に叙せられ瑞寶章を賜はる日淸戰役には野津第五師團長の下に參謀長として規劃參畫し釜山に上陸し京城を經て平壤に入り要害堅固と稱せらるゝ城壘を陷れ更に進んで九連城より龍頭寨三家子塔子餘八盤嶺牛莊田庄臺等の各所に奮鬪を試み將さに北京城頭に日章旗を樹てんとするに際し偶〻媾和成りて廣島に凱旋す功を以て功四級に叙せられ金鵄勳章幷に年金五百圓及び旭日中綬章を賜はる日露戰役には第五師團長として遼太澳に上陸し得利寺蓋平の敵に對する偉大の奇功を奏し次で第四軍の下に屬して析木城の敵を掃蕩し進んで遼陽沙河の會戰に其武名を輝せり大將恭謙にして文武の材能を兼備し博識にして古今の軍機に精通せり

陸軍中將正四位勳一等功二級　男爵　西島助義

西島中將は山口縣の人弘化四年九月を以て生る明治六年二月少尉となり同七年四月中尉に進み同十年四月大尉となる同二十七年十一月歩兵大佐に陞進し日淸戰役の功を以て功三級を賜はり

同三十一年三月少將となり第十七旅團長に任せられ同三十七八年日露の役には第二軍に屬して各地に轉戰し勳功を以て功二級金鵄勳章を賜はり特に華族に列し男爵を授けらる現に第六師團長たり

將軍井七八年出征中乙巳四月滿州渾河右岸長家樣子千歲山に於て招魂祭を營める時左の咏あり

身を捨てゝ功をたてし武士の
名をは千歲の山にとゞめん

陸軍中將從三位勳一等功二級　男爵　淺田信興

淺田中將は舊川越藩士にして明治三年大坂陸軍兵學校に入り同五年三月少尉に任せられ同六年十月中尉に進み西南の役には大尉心得を以て游擊步兵第三大隊參謀副官となり其功に依り勳五等に叙せらる同十一年八月大尉に同十七年三月少佐に任せられ同十九年參謀本部第三局第二課長となり越えて同二十一年三月清國へ派遣せられ同年九月歸朝す同二十四年六月中佐に進み第三師團參謀に補せられ同二十七年三月大佐に昇進し屯田兵參謀長となりしが翌年屯田兵を以て臨時第七師團を組織せらるゝや又た之が參謀長に補せられ同三十年九月少將に任せられ東部都督參謀長步兵第二十旅團長步兵第五旅團長等を經て同三十五年五月近衛師團第一旅團長に補せられたり同三十七年二月征露の軍起るや先づ朝鮮に入り鴨綠江の戰に參加し爾來第一軍の一縱隊として每戰皆功あり岫巖、分水嶺、樣子嶺の戰を經て遼陽沙河に優勢なる敵を擊破し奉天の大戰鬪に於ては後松堡子及び唐究屯附近に行動して金軍追擊に移るや三道溝及び蒲河刚近に進出して遂に敵の大縱隊を包圍降伏せしめ感狀を受領せり將軍虎頭龍髯奇鋒犀利英氣剴切にして一度之を行へば鬼神も之を避く底の概

あり友を千仞の岡に振ひ足を萬里の流に濯ふ將軍の氣節眞に感すべし

遼北出征中恤兵品の扇面赤色特に嚴しき旭日を畫きたるに題して

皇軍をねぎらふ人のまごゝろを
寫すとも見ゆ朝日子のかけ

陸軍中將從三位勳一等功二級　男爵　飯田俊助

飯田中將は山口縣佐波郡防府町の人弘化三年八月を以て生る明治初年身を軍籍に起し少尉より次第に榮進して中將に至る明治三十七八年日露戰役には第二軍に屬し大久保師團長と共に三十七年六月上旬長崎を發し鹽大澳に上陸す當時將軍は步兵第十一旅團長として從軍し大石橋の戰には西島安東の兩少將と共に奮進して大に威名を輝せり功を以て勳一等功二級を賜はり同四十年特に華族に列し男爵を授けらる

陸軍中將從三位勳一等功二級　男爵　塚本勝嘉

塚本中將は岐阜縣の人弘化四年五月を以て生る明治五年三月少尉となり同七年六月中尉となり同十年四月進んで大尉となる同十六年二月步兵少佐となり同二十七年十月大佐に累進せり日清戰役には功を以て勳二等功三級を賜はり同三十年九月陸軍少將に陞進して步兵第二十一旅團長となる同三十七八年日露の役には同旅團を率ゐ第四軍に屬して出征し析木城の激戰には尤も其勇を振へり交戰中陸軍中將となり功を以て勳一等功二級を賜はり同四十年特に男爵を授けられ華族に列せらる現に第九師團長たり

陸軍中將正四位勳一等功二級　男爵　木越安綱

木越中將は東京府華族にして安政元年三月を以て生る明治十年七月少尉となり同十三年五月中尉となり同十六年二月歩兵大尉となる同二十一年二月少佐に進み同二十七年十月大佐となり日清戰役に從事し功あり同三十一年三月陸軍少將となり歩兵第二十三旅團長となり同三十七八年日露戰役には第一軍に屬して仁川に上陸し夫より京城平壤を經て鴨綠江を渉りて滿州に入り各地に轉戰して功あり戰爭中中將に進み凱旋後勳一等功二級を賜はり同四十年特に華族に列せられ男爵を授けらる現今第五師團長たり

陸軍中將從三位勳一等功二級　男爵　土屋光春

土屋中將は愛知縣の人嘉永元年八月を以て生まる明治五年六月

少尉となり同十年五月大尉となる同二十六年十一月更に大佐に陞進せり同三十年九月には陸軍少將同三十五年五月には中將となり明治三十七八年戰役には乃木軍に屬して旅順戰爭に參加し負傷せり功を以て勳一等功二級を賜はり特に華族に列せられ男爵を授けらる現今第十一師團長た

陸軍中將從三位勳一等功三級　男爵　原口兼濟

陸軍中將原口兼濟氏は豐後の人後改めて鄕貫を東京府に移す弘化四年二月十七日を以て生まる父を兼德といひ祖父を兼清といふ明治三年十一月陸軍兵學寮の靑年學舍に入學し同五年三月陸軍少尉に任せられ敎導團附を命せらる同七年三月歩兵中尉に任じ士官學校附となる同八年二月歩兵大尉に任せられ同十年二月

士官學校生徒大隊第二中隊長心得となる此年西南戰爭起り征討軍團附を命せられ遊擊歩兵第三大隊第一中隊長心得に補し戰地に出發せり同年四月大尉に任せられ第四大隊第一中隊長に補せられ西南平定に歸し歸京せり同十三年八月士官學校生徒召集撿査官を命せられ其間斷えず士官學校生徒の野營演習及大演習に從事し以て十五年に至りぬ同十五年三月少佐に任せられ同二十年六月士官學校歩兵科下士學術撿査委員長を命せられ尋て六月戸山學校次長に任せられぬ同二十三年八月獨逸國差遣を命せられ翌年十一月歸朝翌月歩兵大佐戸山學校長に任補せらる同二十七八年日清戰役に從事し第二軍指揮の下に金州に舍營し後に第二軍の戰守序列を脱して金州半島占領地總督の指揮に屬し海城方面守備の任務に就く同二十八年十一月遼東半島守備撤去の爲め蓋平復州を經て宇品に歸着し斯くて戰後尚第四師團の參謀長として勤務したりしも同二十九年九月再び戸山學校長に補せらるされば將軍の尤も長く從事したりしは士官學校生徒隊の司令官及び戸山學校の次長校長として將校の敎育を督勵し及び戰術射擊等の練習を司るの任務に當り幾多青年將校を育成せられしは其功尤も大なり同二十九年九月少將に任せられ玆に出て〻歩兵第二十旅團長に補せられ同卅一年十月臺灣守備混成第一旅團長に轉じ同三十三年五月歩兵第七旅團長となりかくて同三十六年七月一たび休職を命せられぬ同三十七年日露戰役の開始せらるゝや韓國駐劄軍司令官を命せられ其年九月大本營附に轉補し數月總督部參謀長に補せられ同三十八年一月中將に任せられ第十三師團長となり戰線の發展に伴ひ一兵團を率て樺太占領軍司令官となり彼地に上陸し連戰連捷終に全く戡定の功を奏して久しき間露國の爲めに屈辱の厄に遭ひし報復を爲し我邦歷史の汚點を拂拭し去れり勳旋後勳功を以て男爵を授けらる

陸軍中將正四位勳一等功二級 男爵 安東貞美

安東中將は東京府華族にして母を喜久子といひ長野縣飯田町に住するの際女傑として其名高かりし將軍嘉永六年八月を以て生れ明治六年五月少尉となり仝十年五月大尉に進み仝十六年二月歩兵少佐となり仝二十七年十二月大佐に陞進せり次で仝三十一年十月陸軍少將に任し歩兵第十九旅團長となり明治三十七八年日露戰役には仝旅團を率ゐ第二軍に屬して各地に轉戰し功を以て勳一等功二級を賜はり特に華族に列し男爵を授けらる現今第十師團長たり

陸軍中將正四位勳二等功三級 故 前田隆禮

前田中將は大和國十津川の鄕士にして初め十六歳に鄕を辞し夙に勤王の大義を唱へ天下の有志に交り成辰、西南、臺灣の三役皆與

らざるなく日清戰爭には大佐を以て滿州に轉戰し後臺灣征討に功あり日露戰役には我最右翼軍の樞要に參し能く敵の猛將レネカンプの軍を壓迫し清河城より直ちに馬群丹に迫り我最左翼軍をして遠く敵の背後を包圍するを得せしむ其功績は陛下が鴨綠江軍に賜ひたる勅語に昭々たり旅順攻擊には其未期に於て戰鬪に參加し彼の二〇三高地の奪取に就ては少からざる戰功を樹てたり奉天の會戰には其戰爭の激烈なりし爲め將官の負傷したるもの四名今橋、鎌田、渡邊の三少將及ひ前田中將是なり而して中將は負傷後經過不良にして終に野戰病院に卒去せられぬ悼ひ哉中將性倜儻不羈、意風堂々白髯を撫しつゝ陣頭に叱咤す而かも壯烈なる戰略は遂に之を行ふこと能はすして逝けり眞に遺憾の極といふべし

陸軍中將從四位勳二等功四級　男爵　村木雅美

村木中將は高知縣士族保次の長男なり安政三年五月を以て生る同六年五月家督を相續す同八年陸軍士官學校に入り同十二年砲兵少尉に任じ同十三年佛國留學を命せられ歸朝後陸軍士官學校敎官陸軍大臣秘書官となり同二十七八年戰役には勳功を以て勳三等功四級金鵄勳章を賜り同三十九年七月陸軍中將に昇進し東宮武官となり同四十年特に華族に列し男爵を授けらる

陸軍中將從三位勳一等功二級　男爵　鮫島重雄

鮫島中將は薩摩鹿兒島藩士にして嘉永三年九月を以て生る明治八年三月少尉となり同十四年四月工兵大尉に進み次で十九年五月少佐となり同二十七八年戰役には大佐として戰功あり勳三等功四級を賜はり同三十年九月陸軍少將に任じ東京灣要塞司令官と

なり同三十七八年日露戰役には第三軍に屬して交戰し陸軍中將に陞進せり功を以て勳一等功二級を賜はり特に華族に列し男爵を授けらる現に第十四師團長たり

陸軍中將從四位勳一等功二級　男爵　石本新六

石本中將は兵庫縣士族亡勝左衛門の六男にして安政元年一月を以て生る明治八年陸軍士官學校に入り同十二年佛國ヲンテスフロナー砲工實施學校に留學を命せられ同十三年陸軍工兵中尉に任し同三十一年陸軍少將に進み同三十五年同總務長官に翌年陸軍次官に任せらる其間陸軍士官學校敎官臨時陸軍運輸通信部長の要職に在り傍ら伊英佛和の諸國に於ける兵制調査として差遣せらる同廿七八年日淸戰役に功あり功四級金鵄勳章を賜はり同卅七八年日露戰役には陸軍次官として劃策する所多し功を以て

勳一等功二級金鵄勳章を賜はり同四十年九月男爵を授けらる

陸軍中將正四位勳一等功二級　男爵　山中信儀

山中中將は舊山口藩士にして嘉永四年正月を以て生る明治四年十二月陸軍少尉に進み同六年二月大尉に進み同十三年四月步兵少佐となり同二十七年十二月大佐となる同三十二年八月陸軍少將に任じ步兵第十旅團長となる同三十七八年日露戰役には第三軍に屬し旅順攻圍軍に參加して戰功あり勳一等功二級を賜はり特に華族に列し男爵を授けらる現に第十六師團長たり

陸軍中將正四位勳二等功二級　男爵　平佐良藏

平佐中將は山口縣玖珂郡岩國町の人嘉永四年七月を以て生る明

治の初年身を軍籍に列してより累進して中將に至る明治三十七八年日露戰役には陸軍少將として出征し步兵第十八旅團を率て第三軍の下に大活動を爲し頗る偉功を奏せり特に旅順に於ける二龍山砲臺占領に際しては左の感狀を受領せり同四十年特に華族に列し男爵を授けらる

感狀寫

步兵第十八旅團長　陸軍少將　平佐良藏

右は第九師團右翼隊長として第一回旅順要塞總攻擊の後龍眼北方角面堡を攻略し引續き二龍山砲臺の攻擊に任じ長日月間苦心慘憺綿密周到なる盡策を以て攻擊工事を進捗し此間終始多大の損害を蒙るも克く部下を督勵して不撓不屈の精神を發揮せしめ攻擊準備の完成を告ぐるや十二月廿八日輕砲線の爆破と共に突擊を實施し其目的を達するや更に咄嗟に情況を判斷して二龍山

全部を收略するに決し午後六時重砲線に突擊を行ひ之を占領せり少將の此判斷と決心とは最も時機に通じ頑強なる敵も狼狽度を失ひ咽喉部も續て守を失ふに至り茲に二龍山砲臺全部を占領するを得たり

明治三十八年五月廿二日

第三軍司令官男爵　乃木希典

陸軍中將從四位勳二等功二級　男爵　岡崎生三

岡崎中將は高知縣の人嘉永四年正月を以て生る山内候の世臣にして幼より慧敏年十四にして既に慷慨國事を憂ひ慶應年間京師に出て藩の豪傑坂本龍馬に會し其海援隊に加はらんことを求めしか年少の故を以て許されす明治の初年御親兵として東京に上り同五年一月少尉となり同十年五月大尉に進み同十六年二月步

兵少佐となり同二十八年五月大佐に昇る同三十四年二月陸軍少將となり步兵第十五旅團長に任し同三十七八年日露戰役に際しては第一軍に屬して九連城攻擊黑英名占領等に際し大に威名を輝せり後戰功を以て勳二等功二級を賜はり特に華族に列し男爵を授けらる現に第十三師團長たり將軍詩歌を能くし常に左文字を以て誇る蓋し普通人の學び能ふ所に非さるなり

陸軍中校從四位勳二等功二級　男爵　渡邊章

渡邊中將は舊山口藩士にして嘉永四年二月を以て生る明治四年八月少尉となり同十二年三月大尉に進み次で十六年二月步兵少佐に進み同二十七年十一月中佐に昇る日清戰役には功を以て勳三等功三級を賜はり同三十年十月大佐となり同三十四年四月中將に陞進し近衛步兵第二旅團長に任し明治三十七八年日露戰

役には第一軍に属して各所に轉戰し功を以て勳二等功二級を賜はり同三十九年七月中將に進み特に華族に列し男爵を授けらる現に第八師團長たり

陸軍中將正四位勳一等功二級　男爵　中村覺

中村中將は舊彥根藩士千太夫の次男にして安政元年二月を以て生る旅順拔刀隊の驍將として其名世に著し明治十年西南戰爭の際は田原坂の險坂を犯し拔刀を振り翳して賊壘に突入し拔群の効績を擧げ次で日露戰役には第三軍に從つて旅順に向ひ包圍半歲に垂んとすれども難攻不落の要塞未だ全く拔けず敵機關砲の激烈なる攻擊に耐ず此鼠賊を一掃するには拔刀隊に如くものなしとし將軍茲に田原坂の壯擧を繰返さんと決意し機を見て松樹山小案子山の間を拔きて直ちに旅順市街に突入せんとしたり將

軍の膽斗牛を呑むの慨あり然れども事素より容易の業にあらず此二要塞は旅順の咽喉なり頑强の敵如何ぞ猶豫すべき拔刀隊を目がけて打出す銃砲彈は惜氣もなく發射せられ爆烈彈の投下實に慘憺の結果を生じ流石決死の拔刀隊も半は死傷して伏屍累々たり將軍更に動かす我目的を果さずんば「敵壘の土饅頭」とならんと怒髮天を衝きて激勵せしが偶々敵彈右足大腿部を傷け又立つ能はず「無念無念」と連呼しつゝ遂に衛生隊の爲めに收容せられたり斯くして此事業は畫餅に歸したりと雖も將軍の壯擧は百世の下懦夫をして起たしめ三軍の士氣をして軒昂せしむるものあり今や岡澤大將の後を享けて侍從武官長の榮職に昇りぬ其因りて來る所宜なりといふべし

征露の際ものせられたるを擧ぐれば

七たびは生きかはりてもこの仇を

うちつくさずはなにかへるべき

シベリヤのひろ野をかける大鷲を
たゞ一矢にて誰れ射止めなむ
我れ死なば鬼ともなりて戰はむ
かばねはくさのむすにまかせて

陸軍中將從四位勳二等功二級　齋藤太郎

齋藤中將は山口縣阿武郡椿鄉東分村の人嘉永二年十二月を以て生る明治の初年陸軍少尉となり累進して中將に至る明治三十七八年日露戰役の際は步兵第十四旅團長として出征し第三軍に屬して旅順方面の戰鬪に參加し頗る曉名を馳せたり功を以て勳二等功二級を賜はり明治四十年一月後備役仰付らる將軍が二〇三高地占領に對する乃木司令官の感狀は左の如し

感狀寫

步兵第十四旅團長
陸軍少將　齋藤太郎

明治三十七年十二月五日二〇三高地攻擊隊長として其部下を督屬し百般の施設機宜に適し午後一時半其西南角を占領するや好機に乘し東北角に向て攻擊を決行し一擧して高地の全部を占領したり

明治三十八年五月廿二日

第三軍司令官男爵　乃木希典

陸軍中將從四位勳二等功二級　男爵　有坂成章

有坂中將は舊岩國藩士木部左門の二男にして嘉永五年八月を以て山口縣岩國町に生まる庭應三年同藩士有坂長良の養子となり明治二十七年家督を相續す我邦連射式野戰砲の創製者にして有

坂砲と稱するもの是れなり明治十五年四月陸軍砲兵大尉に任せられ爾來累進して同三十九年七月陸軍中將に昇任せり日露戰役には勳功を以て功二級金鵄勳章を賜はり特に華族に列し男爵を授けらる

陸軍中將從四位勳二等功二級 男爵 上原勇作

上原中將は薩摩の人安政三年十一月を以て生まる人と爲り快活豪邁にして膽氣人を壓し果決流るゝが如し曾て工兵監として職に在るや施設頗る多く我工兵隊爲めに面目を一新するに至りたるを見ても其器識の非凡なるを推知すべし常に語て曰く人間の事業は職分を盡す程大なるはなしと是將軍の信條なり將軍は故野津侯の女婿にして常に參謀の重任に當り佛國に遊學して泰西兵學の蘊奥を極め日清戰役の頃には福島將軍と共に參謀佐官として貢獻する所多くハーゲ萬國平和會議に參同しては我が帝國をして九鼎大呂よりも重からしめ文武の才古今の學實に得易からざるの好參謀たり日露戰役には野津軍の參謀長として常に帷幄に參し其計劃せし所悉く圖に當り戰爭の始めより終りに至る迄連戰連勝偉功を奏して帝都に凱旋せり後勳功を以て男爵を授けらる現に第七師團長たり

陸軍中將從四位勳二等功二級 男爵 伊知地幸介

伊地知中將は薩摩鹿兒島藩士直右衛門の長男にして安政元年一月を以て生る明治五年幼年學舍に入り同八年陸軍士官學校に入り同十二年陸軍少尉に任し同十三年五月佛國留學を命せられ同十五年歸朝同十六年近衛步兵隊副官に補せられ同十七年には陸軍卿大山巖の歐州視察に扈從し次で砲兵大尉に進み獨逸に留學す同二十年乃木川上兩將に隨行して歐州諸國の兵制を調査し

同二十一年歸朝す同二十二年砲兵少佐に進み同二十六年參謀本部第二局員となり二十七八年戰役には大本營參謀に補せられ中佐に進む尋て第二軍參謀副長を命せられ金州旅順の戰に參加し役後勳功に依り功四級金瑋勳章を賜はる同三十七八年日露戰役には乃木軍の參謀長となり旅順開城の際は之が委員長となり彼我開城に關する條件及び要塞兵器の受授を了し大に偉功を顯せり同四十年九月男爵を授けられ現に東京灣要塞司令官として令名あり

陸軍中將從四位勳一等功二級 男爵 福島安正

福島中將は長野縣士族安廣の長男にして嘉永五年九月を以て生まる慶應元年江戸に出て、講武所に入り和蘭兵式を學ひ明治二年開成所に入り後大學南校に通學し同六年旧仕して司法省官吏となり翌年陸軍省に轉し西南の役起るや征討軍團筆記生として出征し功あり陸軍少尉に任せられ曾て獨逸公使館附武官となり任期滿ち歸朝に際し西比利亞の兵事視察を命せられ單騎遠征を企て伯林を發して露都を過きウラル、アルタイ二嶺を超え蒙古を跋渉して直隷省に出て北京を經て歸朝す「福島中佐の遠征歌」は當時尤も唱道せられ朝野一般に其行を壯としたり同廿七八年戰役には第二軍參謀として帷幄に參し勳功あり功四級金瑋勳章を賜はり勳三等に叙せられ又北清事變に際しては北京公使館救護に盡力の功著しかりしを以て功三級に進み同三十七八年日露戰役には滿州軍總司令部幕僚として征途に上り偉勳を奏し功二級に陞り同四十年九月華族に列し特に男爵を授けらる現に參謀本部次長の要職にあり

陸軍中將從四位勳二等功二級　男爵　宇佐川一正

宇佐川中將は山口縣士族藤村木郎右衛門の四男にして嘉永二年十一月を以て同縣吉敷郡川鯖村に生れ同縣宇佐川久平の養子となる明治三年伏見敎導隊へ入り明治十二年陸軍中尉に任し爾來累進して第一師團參謀、近衛師團參謀第十師團參謀長、軍務局軍事課長歩兵等二十旅團長等に歷任し才器縱橫軍人中稀に見るの人たり明治廿七八年日淸戰役には第一軍參謀として出征し功を以て功四級金鵄勳章を賜はり同卅七八年日露の役には陸軍省軍務局長として功あり勳二等に敘し功二級金鵄勳章を賜はり特に華族に列し男爵を授けられ現に東洋拓植會社總裁として韓國に在り將軍常に人に語りて曰く人生三分二は不幸の境遇と見るべく餘の三分一は漸く幸福の時代にあり故に此理法を悟らすして榮を逐ひ華を爭ふて境遇を變轉するものは共に事業を語るに足らずと以て其識見の凡ならざるを知るべし

陸軍中將從四位勳二等功三級　楠瀨幸彥

楠瀨中將は舊土佐藩士正志の長男にして安政五年三月を以て生を明治十年士官學校に入り同十二年砲兵少尉に任せられ同十九年乃木希典、川上操六氏に隨行して歐州に差遣せられ同三十四年陸軍少將に同四十年同中將に昇進せり現時樺太守備隊司令官たり其間參謀本部副官、臺灣總督府軍務局、西部都督參謀長、第十二師團參謀長、對馬警備隊司令官、大坂砲兵工廠提理の職に在り明治三十七八年日露の役には第四軍砲兵部長として出征し功を以て功三級金鵄勳章を賜はる

陸軍中將從四位勳二等功二級　大迫尙道

大迫中將は舊鹿兒島士族亡新藏の四男にして安政元年七月を以て生る子爵陸軍大將大迫尙敏(休職)は實に將軍の令兄なり夙に身

を軍籍に列し明治十二年陸軍少尉に任せられ爾來累進して同三十四年少將に進み同四十年中將に陞れり彼の日露戰役の際は野戰砲兵第二旅團長として出征し偉勳を奏し勳二等功二級を賜はる現に敎育總監部に出仕し野戰砲兵監の要職にあり

陸軍中將從四位勳二等功二級　一戸兵衛

一戸中將は青森縣士族範貞の長男にして安政二年六月を以て生る明治七年陸軍戸山學校に入り同十年步兵少尉に任し爾來步兵第十旅團參謀、步兵第二十一聯隊長、中部都督參謀、步兵第四聯隊長、第六師團參謀長、步兵第六旅團長、第一旅團長等に歷補し陸軍中將に累進し第十七師團長となる三十七八年日露戰役に於ける將軍の名聲は旅順要塞奪取に際し盤龍山砲臺の占領者一戸砲臺の名と共に永く人口に膾炙せらる

感狀寫

歩兵第六旅團長陸軍少將正五位勳三等功四級　一戸兵衛

明治三十七年八月廿一日部下旅團及工兵一中隊を以て盤龍山東砲臺を攻撃したるも要塞の猛火を受けて數回の突撃功を奏せず將校以下多大の損害を受け全隊頗る悲慘の狀況に陷るや自ら隊伍を齊へ志氣の挽回に努め遂に翌二十二日盤龍山東西兩部砲臺を攻略し爾後確實に之を占領せり

明治三十八年五月廿二日　第三軍司令官　男爵　乃木希典

將軍出征中法庫門に至る時に北風屑を刺し飛雪紛々たり一詩を賦す

京信頻傳櫻燗煖
何知千里遠征路
東臺墨水競繁華
法庫邊門飜雪花

陸軍中將從四位勳二等功二級　內山小二郎

內山中將は東京府士族にして安政六年二月を以て生る明治十二年十二月歩兵少尉となり同十九年六月大尉に進み同二十四年九月少佐となり同二十七年十二月中佐に昇りて日清戰役に參加し功を以て勳四等功四級を賜はり同三十年十月大佐となり同三十四年六月少將に榮進せり同三十七八年日露戰役には野戰砲兵第一旅團長として第二軍に屬し殊に南山及得利寺攻陷の砲兵指揮官として其威名を轟せり後戰功を以て勳二等功二級を賜はる現に由良要塞司令官たり

陸軍中將從四位勳二等功二級　落合豊三郎

落合將軍は出雲の人紙藏の三男にして文久元年二月を以て生る明治十年陸軍士官學校に入り同年二月工兵少尉に任し爾來累進

して中將に至る資性豁達明敏功を必成に期せずんば止す又容易に是非を語らす先つ實行に徵して而して後之を決す是將軍の本領なり主義なり常て人に語て曰く計劃にして適切ならんか天下又成らざるの事なし其失敗を憂へ不成功を歎するが如きは自己の無能を自白するものにして丈夫の取らざる所なりと以て其自任力の大なるを知るべし日露戰役に際しては奥軍の參謀長となり南山の大捷後第二軍の行動常に異彩を放ち中外をして齊しく其雄風を瞻仰せしむ將軍の如きは才學兼備の良將といふべし

陸軍中將從四位勳二等功三級　東條英敎

東條中將は舊南部藩士東條英俊の長男にして安政二年十一月を以て生る明治五年上京して陸軍教導團に入り同十年薩軍征伐の爲め小倉出發各地に轉戰して功あり翌年陸軍步兵少尉に任し次

で陸軍大學校に入り卒業後累進して少將に進む其間陸軍大學校教授、獨逸國留學生、參謀本部第一局員、參謀本部編纂部長、露國戴冠式に參列せる監軍山縣侯に隨行員、歩兵第八旅團長、留守近衛歩兵第二旅團長、歩兵第三十旅團長等を仰付らる明治廿七八年日清戰役には功を以て功四級に叙せられ同三十七八年日露の役には歩兵第八旅團長として出征し大に威武を輝せり凱旋後勳功により功三級金鴻勳章を賜はる將軍は獨逸メッケル將軍の訓陶を受けたる一人にして尤も歩兵操典に精通せりと傳へらる今は豫備陸軍中將たり

日露戰爭中の戰成として知られたるものは

サア來いと露兵は山にはちまきし

陸軍中將正四位勳一等功二級 男爵 松永正敏

松永中將は熊本縣の人嘉永四年六月を以て生る明治六年五月少尉となり同十二年三月歩兵大尉に任し次で十八年五月少佐に進み同二十八年一月大佐に昇り日清戰役に際し功を以て勳二等功四級を賜はり同三十三年四月陸軍少將となり歩兵第三旅團長に任せられ明治三十七八年戰役には第一軍に屬し歩兵第三旅團長として出征し功を以て勳二等功二級を賜はり凱戰中中將となる明治四十年特に華族に列し男爵を授けらる現に第二師團長たり

陸軍中將從四位勳二等功三級 木村有恒

木村中將は薩德島藩士方辰の長男にして嘉永四年七月を以て生る明治五年三月陸軍少尉に任せられ同三十四年五月陸軍少將に昇進せり日清戰役に出征して功あり功四級金鵄勳章を賜はり同三十七八年日露戰役には近衛第一旅團長として出征し凱旋後功

三級を賜はる同四十年十一月中將に陞進し現に第八師團長たり

陸軍中將正四位勳二等功四級　佐々木直

佐々木中將は山口縣士族にして安政元年十二月を以て生る明治の初年身を軍籍に列し累進して中將に至る明治二十七八年日清戰役には功を以て勳三等功四級を賜はり次で三十七八年日露の役には歩兵第十二旅團長として第一軍に從ひ出征し功を以て勳二等を賜はり同三十九年四月豫備役仰付けらる

明治三十七年五月一日黒木軍の各師團が前面の敵軍を擊退し更に鴨河を徒渉して追擊するに際し木越佐々木の兩少將は第十二師團の（小倉）九州健兒を率ゐて軍の右翼となり最も先んして運動を起し鴨綠江の上流を渡りて敵軍の側面を突き勝敗の大勢を

して確立せしめ更に進んで遼陽攻擊に參加し大に其威名を輝せり後功を以て勳二等を賜はり同三十九年四月豫備役仰付けらる

日露戰爭途上の作

古への宇治のいくさにいや勝る
いさほを立てむありなれの川
初瀨川花も紅葉も散りはてゝ
かぐばしき名は世に流れけん

陸軍中將從四位勳二等功二級　兒玉恕忠

兒玉中將は東京府士族にして嘉永二年五月を以て生る明治の初年身を陸軍に投じ次第に榮進して中將に至る明治二十七八年日清戰役には功を以て勳四等功四級を賜はり次で近衛歩兵第二聯隊長となり同三十七八年日露の役には陸軍少將となり歩兵第十

七旅團長として第二軍に從ひ各所に轉戰して功あり勳二等功二級を賜はり同四十年五月中將となり後備役仰付けらる

陸軍中將從四位勳二等功三級　田部正壯

田部中將は廣島縣士族にして嘉永二年一月を以て生る明治初年身を陸軍々籍に列し累進して中將に至る明治二十七八年日清戰役には功を以て勳三等功四級を賜はり次で明治三十七八年日露戰役には近衛步兵第二聯隊長として第一軍に從ひ出征し交戰中少將となり有名なる黑溝臺の激戰に於て負傷せり功を以て勳二等功三級を賜はり同四十年十一月中將となり後備役仰付けらる

主計總監從四位勳二等功二級　男爵　外松孫太郎

外松主計總監は舊和歌山藩士堀太右衛門の次男にして弘化四年八月を以て生れ同藩外松孫左衛門の養嗣子となり明治五年家督を相續す同十二年仕官して會計軍吏補となり同十六年會計軍吏に進み同三十一年一等監督に進み前野田經理局長の職を辭するや拔擢せられて監督監となり勅任を以て經理局長となり尋て主計總監より主計總監に陞進せり明治三十七八年日露戰役には征露軍の供給をして遺憾なからしめ以て經理の重任を全ふしたり和成りて後勳功を以て功二級金鵄勳章を賜はり同四十年九月特に華族に列し男爵を授けらる

○海軍中將

海軍中將正四位勳一等功一級　男爵　上村彦之丞

上村中將は嘉永二年五月一日を以て薩摩國鹿兒島加治屋町に生まる戊辰の役十六才の青年を以て始めて軍に從ひ白川口に出戰して負傷し瘡痍未た癒えさるに拘はらす再ひ戰場に臨む人皆其豪氣に驚く明治四年海軍兵學寮に入り研究三年業を卒へて軍艦筑波に乘組み清國臺灣米國等に遠洋航海を試み同九年玄揚艦に轉し內海を航行せしが同艦紀劦灘に於て破懷の厄に遭ひ艦員の全部を失はんとせしも將軍毫も動せず其處置宜しきを得たる爲め何等の障害を見ざりき同十年西南戰爭には海軍少尉として鹿兒島に趣き勳功を樹て同十五年朝鮮事件の際も出征したりき同十七年四月大尉となり二十三年九月少佐に進み千代田天城、大和摩耶、鳥海の諸艦に轉乘し艦長に進み二十七八年日清戰役の際は秋津洲艦長として出征し豐島沖に於て敵の運送船操江號を砲擊し遂に之を捕獲せり後黃海の大戰、澎湖島の占領に殊功を樹て二十八年十月故北白川宮殿下の遺骸を奉護して東京に歸り次で

海軍省人事課長となり海軍大學校學生詮衡委員となり少將に進み造艦監督長より海軍省軍務局長に轉じ三十五年海軍々司令部次長を兼ね同年更に常備艦隊司令官に補せられ三十六年軍艦松島に座乘して南洋を航行し歸朝後中將となる三十七八年戰役には第二艦隊司令長官に補せられ或は浦鹽艦隊を蔚山沖に擊ちて其橫暴を抑へ或は沈溺敵兵を救助して恩德を布きたるが如き皆列國の賞讃を得ざるはなし中將寡言沈點事物に拘泥せす人と語るや呵々大笑曾つて些の冗語を發するなし其嗜好としては唯小禽と犬を愛するあるのみ

海軍中將正四位勳一等功二級 男爵 出羽重遠

出羽中將名は重遠舊會津藩の士族にして安政二年十二月十七日を以て生る年長じて海軍兵學寮に學び明治十八年には軍艦浪速

の回航員として英國に派遣せられ其任務を了へ皈朝するや再び軍艦常磐の回航委員となり英國に渡航す二十七八年の日清戰役には軍艦松島に坐乘して黃海に奮戰し勳功大に揚る北清事件に際しては司令官となり軍艦淺間に座乘し三十三年少將となり佐世保常備艦隊司令官に補せられ三十七八年戰役には第三艦隊司令官となりて出征し中將に陞進せり平和克復に及ひ戰功に依り男爵を授けらる中將人と爲り嚴格にして規律を重んじ早眠早起を以て誇りとなす居常邊幅を飾らず人と交るに未だ嘗て城壁を設けたることなしとふ

海軍中將正四位勳一等功二級 男爵 瓜生外吉

瓜生中將は加賀大聖寺藩の士族にして安政四年正月二日を以て生まる其海軍兵籍に入りしは明治五年九月にして海軍兵學校に入り卒業後遠く米國に航して彼地の兵學校に入り皈朝以來名聲我海軍部内に喧し同十五年九月海軍大尉となり同二十年十月少佐に進む日清戰爭の際には佛國公使館附武官として彼地に在り戰線に加はること能はざりしが北清事件の頃には海軍々令部第一局長として謀議に參加せり同三十七八年戰役に際しては第二艦隊司令官となり其劈頭に於て露艦二隻を仁川港口に窮追し遂に之を破壞せしめ一擧にして早くも敵國の膽を奪ひ我國民の敵愾心を奮起せしむ日本海大海戰には出羽艦隊と終始共同連繫して敵の巡洋艦隊に對して反航戰を開始し大に奇功を奏したり後平和克復に及ひ戰功を以て華族に列せられ男爵を授けらる中將資性豪放にして細事に拘泥せず部下を督勵するや號令嚴肅にして一歩も犯す能はす平時と雖も毫も戰鬪準備を忘れしことなしといふ

海軍中將從三位勳一等功一級 男爵 片岡七郎

片岡中將は舊鹿兒島藩士にして嘉永六年十二月を以て生まる明治四年九月海軍々籍に入り兵學校を卒業して少尉候補生となり實地練習として獨逸軍艦「ウヰネダ」號に乘組み歐洲諸國を巡航し皈朝の後少尉に任せられ十四年十二月大尉に進み二十二年少佐を以て山階宮殿下の獨逸御留學隨行を命せられ次で彼地に在る我公使館附武官に補せられ二十三年九月大佐に昇り駐まること六年此間將軍が軍事上の智識を蘊蓄すること頗る多し二十七八年日清戰爭の開始せらるゝや急に皈朝を命せられ暫らく海軍々令部に勤務せしも同年末金剛艦長に補せられ次で浪速艦長となり臺灣戰爭に赴き凱旋後功四級に敍せられ爾後橋立・八島艦長となり常備艦隊參謀長、海軍省人事課長となり三十二年六月少將に任せられ呉鎭守府司令官に補せられ又艦政部長となり三十五年竹敷要塞司令官に補せられ翌年九月中將となる三十七八年の

日露戰爭には膠州灣及芝罘に於ける敵艦艇の武裝解除を遂げ海軍作戰の一段落を告くるに至れり當時の報告左の如し

旅順口に在る敵は一日(三十八年一月)夜を以て開城を我包圍軍に提議したる後同港內に在る大小艦船を自ら破壞し又數日來港外に在りし「セバストポリ」及「オトワスヌイ」をも沈沒せしめたり而して六隻の驅逐艦は夜に乘して沖合に脫出したるを以て我封鎖艦隊中の一部之を進擊せんとしたるに敵はあらん限の速力を以て遁逃し我秋津洲艦長(中佐山屋他人)茲に一驅逐隊(司令中佐藤本秀四郎)一水雷艇隊(司令中佐笠間直)は芝罘方面に又第三艦隊司令官東鄕正路は千代田(艦長大佐村上格一)龍田(艦長中佐釜屋忠道茲に一驅逐隊(司令中佐鈴木貫太郎)を率ゐ膠州灣方面に各々之を追躡し遂に武裝解除を實行せしめ敵艦隊の全部を殲滅し得たるは一に大元帥陛下の御稜威に因るものにして又勇敢忠烈なる陸軍の攻擊敵艦船をして蟄伏する所なか

らしめたるもの與て大に力ありたるを信し本職は茲に當方面に於ける最も光輝ある作戰の一段落を告くるに至りたるを報告す

海軍中將從四位勳二等功二級 男爵 三須宗太郎

三須中將は舊彥根藩の士族にして安政二年八月六日を以て生る明治四年海軍兵學寮に入り七年臺灣征伐に際しては高雄丸に搭し出征し同十年西南戰爭には鹿兒島地方に廻航し同十四年始めて少尉となり孟春、攝津、淺間の諸艦に轉乘し同十八年には浪速艦回航委員として英國に派遣せられ同十九年大尉に進み龍驤艦副長となり同二十四年少佐に任せられ翌年金剛副長として北米に派遣せられ尋て大佐となり同二十七八年戰役には海軍省に在りて戰爭に加はること能はす同三十二年には朝日艦長となり後英國に留學し同三十四年七月少將に累進し人事局長となり同三十七八年日露戰役に際しては第二戰隊司令官となり日本海大海戰に參加し勇進奮鬪終に敵彈の爲めに負傷せり後戰功を以て華族に列し男爵を授けらる

海軍中將正四位勳一等功一級 男爵 伊集院五郎

伊集院中將は薩摩の人先代才之丞の長男にして嘉永五年九月を以て生る明治四年海軍兵學寮幼年學舍に入學し同七年雲揚艦乘組となり明治十年西南の役鹿兒島に出航し參軍傳令使を命せらる後砲術海航術研究の爲め英國に留學し同十五年卒業し更に水雷術研究の爲め獨逸に赴きクリンムキヅチ海軍大學校に入り卒業後歸朝し從七位に叙せられ海軍中尉に任せらる同二十二年累進して少佐に陞り從六位に叙し千代田艦副長となり同二十七八

年の役には大佐として大本營參謀官に補せられ勳四等に叙し瑞寶章を賜はる次で海軍々令部第一局長に補し又武功調査委員海軍々令部秘密圖書檢閲及海軍技術官會議々員に兼補せられ其功鮮からす仍りて功四級金鵄勳章及ひ旭日小綬章を賜はる同三十二年少將に進み海軍々令部次長兼海軍將官會議々員たり幾もなく常備艦隊司令官に補し同三十六年九月中將に昇任し更に前職に轉補せられ正四位に叙せらる同四十年日露戰役の功に依り勳一等功一級となり同年九月華族に列し男爵を授けらる先年遺米艦隊司令官となり米國に航し彼邦の歡待を受けしは洽ねく人の知る所なり

海軍中將從三位勳一等功二級 男爵 日高壯之丞

日高中將は薩摩鹿兒島藩士宮内清之進の四男にして嘉永元年三月

を以て生る元治元年同藩士日高藤左衛門の養子となり同年家督を相續せり夙に身を海軍に列し爾來金剛、武藏、龍驤、松島の各艦長海軍兵學校長、竹敷要港部司令官常備艦隊司令官等の榮職に昇り明治三十七八年戰役には勳功を以て功二級に陞叙せられ同四十年特に華族に列せられ男爵を授けらる現に舞鶴鎭守府司令官

海軍中將正四位勳一等功二級 男爵 齋藤實

齋藤海軍中將は岩手縣平民齋藤耕平の長男にして安政五年十月を以て生まる明治十五年海軍少尉に任し爾來累進して海軍中將に至る其間富士、和泉艦副長、常備艦隊參謀、秋津洲嚴島艦長、海軍々務局長、海軍總務長官、海軍次官等を經て海軍大臣に陞進す同三十九年四月日露戰役の功に依り功二級金鵄勳章を賜はる

り同四十年九月華族に列し男爵を授けらる夫人を春子といひ先代子爵仁禮景範の長女にして子なし東京府平民豊川良平の五男齊を養子とせり將軍學者の家に生まれ資性温厚にして大器あり同縣の士皆師として之に事ふ常に青年の指導に心を注き各種の會合に出席し諄々として訓戒至らざるなし人皆其德に服す

海軍中將正四位勳二等功四級 尾本知道

尾本中將は靜岡縣の人藤右衛門の長男にして明治五年八月海軍少尉に任せられ爾來累進して海軍中將に陞れり其間天城、海門、高雄、千代田の各艦長となり又佐世保、横須賀各鎭守府參謀長佐世保艦政部長等の要職に轉補せられたり

海軍中將正四位勳二等功三級 男爵 梨羽時起

梨羽中將は長州の人嘉永三年九月二十九日を以て生まる海軍中將有地品之允氏の令弟なり幼時梨羽家を繼き其姓を冒す初め海軍兵學寮に入りしが中途にして退學し後工部省の測量技師となり更に轉して內務省の地理技師となり明治十三年再ひ海軍に入りて中尉となり同二十七八年戰役には海軍少佐を以て軍艦千代田の副長となりて勳功を顯はし北清事變の際には大佐を以て初瀨艦長となり後吳海兵團長に轉し少將に進み日露戰端を啓くに方りては第一戰隊司令官となりて出征し大に偉功を奏せり行賞の結果男爵を授けられ華族に列せらる中將人となり豁達にして城壁を設けず眞率にして質撲頭腦緻密にして明晰實に數學的の思想に富む殊に船艦操縱に巧にして三浦新井の兩將と共に海軍の三達人と稱せらる

海軍中將 男爵 故 東鄉正路

海軍中將東鄉正路氏は舊福井藩士にして嘉永五年三月を以て生まる明治五年海軍兵學寮に入り同十一年海軍少尉に任し同二十三年累進して少佐となり同二十六年千代田副長より滿珠艦長に轉じ同二十七八年征清の役には鳥海艦長より西京丸航海長に轉じて威海衛占領に與て功あり戰役中天城艦長に補せられ更に大佐に進み同三十五年海軍少將となり海軍兵學校長となる同三十七八年征露の役起りてより第六戰隊司令官となり日本海々戰には瓜生艦隊と共に敵艦の擊攘に努め遂に大捷を得たり嗣子安氏其家を襲ぐ

海軍中將從四位勳二等功四級 細谷資氏

細谷中將は東京府士族にして父を重氏といひ安政四年十二月を以て生る明治十一年海軍少尉に任せられ同十九年四月大尉に進み同廿三年には少佐となる同二十七八年戰役には千代田艦副長として勳功を顯はし橫須賀水雷團長、同鎭守府參謀長、海軍砲術練習所長を經て大佐に任せられ同三十五年四月海軍々令部第三局長となりて少將に昇進し日露戰役には鴨綠江の激戰に奇功を奏したり其作戰の如き從來殆んど其例を見す蓋し水雷艇を放ちて敵の騎兵を砲擊せしめ海陸接戰の奇觀を呈し以て陸兵に强力なる掩護を與へ遂に長驅して九連城を占領するに至らしめたり當時將軍の機に應じ變に處し措置其宜しきを得たるを思へば其手腕の敏なる又以て推賞するに足らん將軍に一の警語あり曰く

「我に克ち味方に捷つて敵に勝つ是を武將の三勝と云ふ」と味ひある言といふべし

○陸軍少將 丸井政亞

陸軍少將從四位勳二等功三級

大孤山上陸軍中に其人ありと知られたる丸井少將は後備歩兵第十六旅團長として上陸後各地に轉戰し勇往邁進遼陽の難關を陷れ更に沙河大會戰に於ては當日隨一の難局と稱せられし三塊石山に奮戰激鬪して大敵を破り武名を天下に嚇かせしも遂に名譽の戰傷を負へり此三塊石山は其名の如く全山岩石より成り且つ峻嶮にてし攀登すること容易にあらずされば第一線には射撃を爲さしめ第一線以下の諸隊には銃劍を以て戰ふの準備を爲し深夜激烈なる强襲を試み其戰鬪の猛烈なる遼陽に下らず遂に山頂を占領したり其際將軍は敵彈の破片にて負傷し鮮血淋漓たるも尙屈せず敵を追撃前進することと約三千メートルにして繃帶所に引返せり此役敵の中佐を始め健康捕虜二百名以上戰利品として大砲四門其他夥しき武器を鹵獲したり此良將軍の名は永く三塊石山と相對して沒することなかるべし

陸軍少將正五位勳三等功三級 摺澤靜夫

陸軍少將從四位勳二等功三級 澁谷在明

澁谷少將は舊和歌山藩士澁谷在質の長男にして安政三年六月を以て生る明治十二年陸軍少將に入學同三十四年陸軍少將に昇進し現時陸軍輜重兵監たり又東宮武官騎兵副官騎兵第十五聯隊長等に在職せり日清戰役には功を以て功四級を賜はり次て日露の役には兵站監として其名高かりき凱旋後功三級金鵄勳章を授けらる

摺澤少將は宮城縣士族にして嘉永六年一月を以て生る明治十年四月少尉となり同十七年五月歩兵大尉に進み同二十五年二月少佐となり同二十七八年日清戰爭には功を以て勳三等功四級を賜はり同三十年十月中佐に進み同三十三年十月更に大佐に昇り近衛歩兵第一聯隊長に任し同三十七八年日露戰爭には功を以て勳三等功三級を賜はりたり現に臺灣第二守備隊司令官として勳務せらる

陸軍少將從四位勳二等功二級　長岡外史

長岡少將は山口縣平民堀三左衛門の次男にして安政五年五月を以て生る明治三年同縣士族長岡南陽の養嗣子と爲り同十三年家督を相續す同八年陸軍戸山學校に入り同十二年陸軍歩兵少尉に任せられ同十六年陸軍大學校に入學し同三十二年歐州へ差遣せられ同三十五年陸軍少將に昇進し第九旅團長に補せられ現時歩兵第二旅團長たり殊に第一師團參謀、軍務局軍事課長、參謀本部次長在職中は其功績顯著たり日露戰役の際に於ける參謀本部次長としては其樞機に參劃する所頗る多かりき

陸軍少將從四位勳二等功二級　大谷喜久藏

大谷陸軍少將は東京府平民にして安政三年六月を以て生る明治十二年二月少尉となり同十九年五月歩兵大尉に進み同二十八年四月には中佐を以て日清戰爭に從ひ功を以て勳四等功四級を賜はり同三十年十月大佐に陞進せり同三十五年六月少將となり日露戰役には歩兵第八旅團長として第四軍に從ふて出征し功あり勳二等功二級を賜はり現に教育總監部參謀長兼將校生徒試驗常置委員長たり

福永少將は東京府士族にして安政元年二月を以て生る明治の初年少尉となり夙に砲術を研究し累進して同三十七年九月少將となる日露戰役には砲兵第四聯隊長として第二軍に屬して出征し大石橋の砲擊には大に敵の膽をして寒からしめたり功を以て勳二等功三級を賜はり同四十年三月後備役仰付けらる

陸軍少將從四位勳二等功三級　福永宗之助

永田少將は熊本縣士族にして安政四年十二月を以て生る明治十二年二月少尉となり同十八年五月砲兵大尉に進み同廿四年少佐となり同廿七八年日清戰役には中佐に昇進し功を以て勳三等功級を賜はり同二年一月大佐となり野戰砲兵第五聯隊長に任せらる同卅七八年日露戰役の際は少將に進み第三軍砲兵隊長となり大に武名を輝せり功に依り勳二等功二級を賜はり現に舞鶴要塞司令官たり

陸軍少將正五位勳二等功三級　永田龜

梅澤少將は宮城縣士族道貞の次男にして嘉永六年十月を以て生る明治二十七年分家して一家を創立す明治五年陸軍歩兵少尉に任し同三十二年大佐に進み同三十七年少將に陞進す日清戰役には第二軍兵站部司令官となりて出征し功を以て功四級金鵄勳章を賜はり平定後近衛歩兵第四聯隊長に補し日露交戰中陸軍少將に昇進せり日露戰役には近衛後備歩兵旅團長として有名なる本溪湖の激戰に露軍の逆襲を破り梅澤旅團の名は敵の心膽を寒からしめたり次で大嶺の防戰、鐵嶺の占領を經て梅花園の名益々

陸軍少將正五位勳二等功二級　梅澤道治

香しく功に依り勳二等旭日章及功二級金鵄勳章を賜はる現時近衛歩兵第二旅團長たり

陸軍少將從四位勳二等功二級 秋山好古

秋山少將は愛媛縣士族久敬の三男にして安政六年一月を以て生る明治十二年十二月騎兵少尉となり爾來累進して同三十五年六月陸軍少將に昇進し同三十七八年日露戰役には第二軍に屬し騎兵第一旅團長として出征し大石橋、得利寺の戰に功あり同三十九年四月勳二等に叙し功二級金鵄勳章を賜はる

陸軍少將正五位勳二等功二級 依田廣太郎

依田少將は京都府士族にして安政元年三月を以て生る明治十年十二月少尉となり同十九年五月歩兵大尉に進み同二十五年一月少佐となり同三十一年十月大佐に補せられ歩兵第四十七聯隊長、となる同三十六年十二月少將に進み第十六旅團長に補せられ同三十七八年日露戰役には功を以て勳二等功二級を賜はる現に歩兵第一旅團長たり

陸軍少將從四位勳二等功三級 馬塲命英

馬塲少將は奈良縣士族宇野兵左衛門の次男にして嘉永四年一月を以て生る安政二年一月馬塲勇左衛門の養嗣子と爲り慶應元年五月家督を相續せり始め陸軍兵學寮に入り明治六年陸軍歩兵少尉となり爾後累進して九龜大隊區司令官、歩兵第四聯隊長等に歷任し陸軍少將となり同三十七八年戰役の際は第一旅團長として出征し彼の二〇三高地占領には尤も功績を顯せり爲めに功三

級金鵄勲章幷に勲二等旭日章を授けらる現時歩兵第九旅団長た
り

将軍二〇三高地占領の後敵の勢いたく挫けたりとて咲める

昨日今日あたの弾の音
しつまりて
そらゆくかりのつらも
みたれつ

陸軍少将正五位勲二等功二級　豊島陽蔵

豊島少将は廣島縣の人文禮の二男にして嘉永五年九月を以て生る明治十二年陸軍砲兵少尉に任し砲兵射撃學校卒業後要塞砲兵射撃學校長となり次て東京灣要塞聯隊長に歷補し明治廿七八年日清戰役の際は勳功を以て功四級を賜はり同卅七八年日露の役には第三軍砲兵部長となり旅順攻撃に參加し拔群の功績を顯はし功二級金鵄勲章を賜はりたり現に陸軍少將として要塞砲兵監

陸軍少将正四位勲二等功二級　友安治延

友安少將は勇敢無双の傑士なり明治卅七年乃木將軍の率る第三軍は專ら其勢力を旅順方面に集注し旅順陷落の一日も速かならんことを期待せり當時二〇三高地攻撃の主働者とも稱すべきは友安少將の率ゐたる後備歩兵第一旅團なりとす同年九月第一回の攻撃に於ては多大の損害を蒙り不成功に畢りしを以て攻撃方法を變更し攻路作業を起し約四十日を費して岩石層を掘進し血を濺き骨を碎り忍ひ難きの困苦を忍ひ胃し難きの危險を胃して竣工したるもの即ち吉田大尉の考案に成れる複攻路なり本攻路

によりて攻擊に頗る便宜を與へ我多數の增加隊は之に依りて途中尤も安全に運動することを得たり而して攻擊は續行せられ危機益々迫り其部下に屬する香月中佐の突擊大隊も彈丸雨下の間を冒して勇躍奮進遂に頂點に達したるが敵砲臺の猛火に襲はれ八十名の突擊隊中生存するもの僅かに五人策の施すべきなきを以て將に頂點より退却せんとす少將聲を勵まし叫んで曰く「多數戰友の血を漑き屍を積んで僅かに得たる頂點を今見捨つるとは何事ぞ疾く々引返へせ」と叱咤したり渠等は聊か遲疑する色なく快く命を領して死地に歸れり之を見たる少將は涙を飮み勇壯なる渠等を救へと部下を督し土嚢鐵板を送りて頂點に防禦工事を施し其一角を據守したり今や少將は增加せる援兵を用ひ盡し僅かに二個中隊の豫備あるのみ少將自ら之を指揮し敵の慓悍なる逆襲、爆藥銃擊を意とせず累々たる死屍を除き進路を開かんとして當さに掩蓋下に前進したる際突然齋藤(太郎)少將の應援隊來

れるに會す此に於てか友安少將は命令により攻擊指揮を齋藤少將に讓れり嗚呼眞に千古の美談香月中佐の突擊隊生存者に對する將卒の衷情、吉田大尉の攻路作業等は二〇三高地占領に於て友安隊の誇りとする所而して斯く功績ある吉田大尉が作業竣工後數日を出てすして少將の副官たる乃木少尉と相幷び太平溝の小松原に墓標の主となりたるぞ果敢なき蓋し又千古の遺憾なり

陸軍少將正四位勳二等功三級 故 山本信行

山本少將は山口縣周防國三田尻の人家代々藩主毛利家の御舸子を勤め御船藏の役人たり少將幼にして活潑頗る氣節に富み稍長するに及んで故高杉晋作、山縣狂介(有朋公)氏の率る騎兵隊に加はりて四境の變及ひ討幕の大義を奉して東北の地に轉戰して功あり後西南の役に從ひ日清戰爭の當時にありては大山軍司令官

に從ふて第六師團の參謀となり花園口に上陸し各所に激戰し中佐に昇進したり明治卅七八年日露戰役には九連城摩天嶺に奮戰し猛烈なる打擊を敵軍に加へ大に仙蓋兵の威名を輝かせり同卅七年七月少將に陞進して步兵第一旅團長に榮轉し爾來各所の激戰に參加し其功頗る大なりしが惜哉旅順攻擊中敵彈の爲めに名譽の戰死を遂けられたり

陸軍少將正五位勳二等功三級 岡市之助

岡少將は京都府士族吉春の次男にして萬延元年三月を以て生る明治五年二月家督を相續せり同十四年十二月步兵少尉となり同二十五年三月大尉に進み同二十八年五月少佐となり同三十五年五月大佐に陞り同三十七八年日露戰役には交戰中少將となり功を以て勳二等功三級を賜はる現に參謀本部總務部長たり

陸軍少將從四位勳二等功三級 池田正介

池田少將は山口縣の人安政二年五月を以て生る明治の初年身を陸軍に投じ累進して少將に至る明治三十七八年日露戰役には第三軍に屬して出征し功あり同三十八年一月陸軍少將に任し勳二等功三級を賜はる同四十年三月豫備役仰付けらる

陸軍少將從四位勳二等功三級 石原應恆

石原少將は群馬縣士族にして嘉永三年九月を以て生る明治の初年陸軍少尉となり累進して少將に至る明治二十七八年日清戰役の隊は功を以て勳三等功四級を賜はり次で步兵第十八聯隊長となり同三十七八年日露戰役には兒玉(如忠)旅團の部下となりて出征し功を以て勳二等功三級を賜はり交戰中少將となりしが同四

十一年三月後備役仰付けらる

陸軍少將正四位勳二等功三級　鎌田宣正

鎌田少將は第十師團長たる川村景明氏の太孤山上陸軍に加り東條旅團の部下に屬し歩兵第四十聯隊長として岫巖、分水嶺、橋木城等の激戰を經て淺田枝隊と連繫して敵背を衝き其位置を益々確實ならしめたり殊に橋木城占領の際に於ける第十師團の消費彈數を檢するに歩兵第十聯隊は一、四八〇歩兵第三十九聯隊は四一、〇五六なるにも拘はらす鎌田聯隊にては七七、一六五を費消たり以て其苦戰の狀察すべし

陸軍少將正五位勳二等功三級　本鄉房太郎

本鄉少將は兵庫縣士族にして萬延元年十一月を以て生る明治十二年十二月歩兵少尉となり同二十四年九月大尉に昇進し同二十八年六月少佐となり同三十五年十一月大佐に任し歩兵第四十二聯隊長に補せられ同三十七八年日露戰役には塚本勝嘉旅團に屬して出征し功を以て勳二等功三級を賜はる現に陸軍省人事局長文官普通試驗委員長、文官普通懲戒委員、官國幣社神職高等試驗委員長、官國幣社神職尋常試驗委員長、陸軍勳功調査委員たり

陸軍少將正五位勳二等功二級　小原芳次郎

小原少將は愛媛縣平民にして嘉永五年九月を以て生る明治十年五月少尉となり同十八年一月歩兵大尉に進み同二十四年九年少佐となり同二十八年戰役には功を以て勳三等功三級を賜はり

同三十三年十月大佐に昇り近衛歩兵第三聯隊長となり同三十七八年日露戰役には渡邊(章)旅團の部下に屬して奮戰し功を以て二等功二級を賜はる現に歩兵第三十旅團長たり

陸軍少將從四位勳二等功四級 岡田貫之

岡田少將は鳥取藩士藪田將貫の次男にして嘉永六年十一月を以て生る幼にして藩立尚德館に學ひ明治三年上京して佛學及ひ數學を修め同五年陸軍教導團に入り同七年進みて士官學校に入り同八年陸軍砲兵少尉に任せられ翌年輜重兵科に轉す明治十年西南戰爭には功を以て動六等單光旭日章を賜はり戰時用冷鐵飛具制定の際之が審査員となり戰時行李或は輜重具戰時用木鍛工改良し現に我陸軍に於て使用するもの多くは其發明に係る明治二十七八年日清戰役には第三師團輜重兵第三大隊長として出征し功を以て功四級金鵄勳章を賜はる同三十二年輜重兵監に任し同三十七年陸軍少將に昇進し正五位に叙せらる同三十七八年戰役には兵站部總監として動功あり殊に將軍の研究改良したる輜重車は戰地に於て大に奏功せり依て動二等を賜はり同三十九年豫備役仰付けらる

陸軍少將正五位勳二等功二級 小泉正保

小泉少將は茨城縣士族にして安政二年十月を以て生る明治十年七月少尉となり同十七年歩兵大尉に轉し同二十八年三月中佐となり同二十九年五月更に歩兵大尉に進み同二十三年五月屯田兵中佐に轉し同三十年十二月大佐となり第七師團參謀長となり次で三十六年七月陸軍少將に陞進同三十七八年日露戰役には大久保師團の部下に屬し第二十四旅團長を以て出征し大石橋其他の

激戰に功あり勳二等功二級を賜はる現に歩兵第六旅團長たり

明治三十七八年戰役に際し啄したるものを擧くれば

いよ〳〵動員令に接して

山ざくら春にはよしやおくるとも

朝日に匂ふ色はかはらじ

出發の時

かねてよりかくとは思ひさだめしも

母にわかれのをしまるゝかな

子に示す

親につかへ學ひにはげみひたすらに

おのれ〳〵の身をばみがけよ

陸軍少將正五位勳二等功三等　仙波太郎

仙波少將は愛知縣平民にして安政二年八月を以て生る明治十二年二月少尉となり同十九年五月歩兵大尉に進み同二十六年四月少佐となり同三十年十月大佐に昇り同三十六年十二月少將に任し同三十七八年日露戰役には第三軍に屬して出征し功あり勳二功三級を賜はる現に歩兵第十八旅團長たり

陸軍少將正五位勳二等功三級　村山邦彥

村山少將は廣島縣士族にして嘉永五年十月を以て生る明治十年六月少尉となり同二十年十二月歩兵大尉に進み同二十六年四月少佐となり同三十二年八月大佐に陞り同三十七八年日露戰役には陸軍少將として戰功あり勳二等功三級を賜はる現に歩兵第二十一旅團長たり

陸軍少將從四位勳二等功二級　神尾光臣

神尾少將は長野縣平民にして安政二年一月を以て生る明治十二年二月少尉となり同十八年八月大尉に進み同二十四年十二月少佐となり同二十七八年戰役には功を以て勳四等功四級を賜はり同三十年十月大佐となり同三十五年五月少將に累進せり同三十七八年日露戰役には歩兵第二十二旅團長として第三軍に從て出征し旅順攻圍軍の職將たり功を以て勳二等功二級を賜はる現に近衛歩兵第一旅團長たり

陸軍少將正五位勳二等功四級　佐治爲善

佐治少將は兵庫縣平民にして安政元年十二月を以て生る明治五年月三少尉となり同十三年七月歩兵大尉に進み同二十年四月少佐となり同三十七年四月大佐に昇り歩兵第九聯隊長に補せられ同三十七八年日露戰役には少將として出征し戰功を以て勳二等功四級を賜はる現に歩兵第九旅團長たり

陸軍少將從四位勳二等功三級　谷山隆英

谷山少將は舊鹿兒島藩士にして嘉永四年五月を以て生る明治初年少尉となり累進して少將に至る明治二十七八年日清戰役には功を以て勳三等功四級を賜はり次で大佐に進み歩兵第十六聯隊長となる同三十七八年日露戰役には同聯隊を率ゐ岡崎旅團の部下となりて出征し黒木軍の遼陽攻撃に際し太子河の上流を徒渉し敵の退路を斷たんと擬する時に敵の大軍黒英臺に逆襲し來り馬坳(命英)谷山の兩聯隊奮戰して擊退し目覺しき戰功を奏す後大佐より少將に昇進し勳二等功三級を賜はり同四十年十一月豫備役

仰付けらる

陸軍少將正五位勳二等功三級　田村久井

田村少將は東京府士族にして嘉永四年三月を以て生る明治十四年騎兵少尉となり同二十五年十一月大尉に進み同二十七八年日露戰役には騎兵第十三聯隊長として第二軍に屬して各所に轉戰し同三十二年大佐に陞り同三十七年十二月少佐となり同三十七年九月少將に任せられ功を以て勳二等功三級を賜はる現に騎兵第二旅團長たり

陸軍少將從四位勳二等功三級　押上森藏

押上少將は岐阜縣の人吉兵衛の三男にして安政二年十二月を以

て生る明治十二年陸軍砲兵少尉に任し東京砲兵工廠製造所長、臺灣守備隊混成第一旅團參謀長等の要職を經累進して少將に至る日清戰役には功四級を賜はり明治三十七八年の役に際しては大本營幕僚となりて出征し勳功を以て功三級を賜はる

陸軍少將正五位勳二等功二級　南部辰丙

南部少將は加賀國金澤の藩士にして明治六年陸軍教導團に入り卒業し同八年士官學校に入學同十年には少尉に任せられ同廿二年陸軍少將長岡新六氏と共に獨逸に留學し備さに歩兵教典を研究し殊に戰術と散兵術とに就て造詣する所深かりし歸朝後或は敎官となり或は參謀本部附となり多くは重要なる地位を占めたるが將軍の唯一の希望は模範的聯隊を爲るに在り之を以て自ら乞ふて名古屋に下り爾來熱心に聯隊訓練に從事し其功頗る著る

し明治三十七八年戰役には大佐を以て出征し名古屋の六聯隊長となり宇品を出船し塩太澳に上陸後金州南山の戰には軍の難局ともいふべき左翼方面にありて勇敢無比の働作を爲し大に武名を輝せり得利寺の戰了るや少將に昇進し一旦歸國して後備旅團長となりしが更に再征の途に上り遼陽戰に參加せり其尤も人口に膾炙するは奉天の大戰に際し李官堡に敵軍の包圍を受け苦守遂に中央軍との聯絡を保ち敵をして其計劃を捨つるに至らしめたるの功績に在り少將現に陸軍士官學校長として多年の宿望たる士官の養成に盡瘁せらるる日本軍隊の花是より一層芳しからん

陸軍少將從四位勳二等功二級　井口省吾

井口少將は靜岡縣の人幹一郎の次男にして安政二年八月を以て生る明治八年十二月陸軍士官學校に入學し卒業後中尉に任じ十

七年二月陸軍大學校に入學を命ぜられ翌年五月大尉に任じ二十年五月獨逸に兵學研究の爲め留學を命ぜられ二十三年十二月歸朝翌年四月陸軍大學校敎官に補せられ同年十一月少佐に昇任し同二十七八年日清戰役の起るや第二軍參謀として出征し次て中佐に進み役平きて功四級金鵄勳章幷に單光旭日章を賜はる二十九年十一月勳五等瑞寶章を授けられ同三十四年四月陸軍省軍事課長に補せられ三十五年四月少將に任じ參謀本部總務部長となり同三十七八年日露の役には滿州軍總司令部幕僚となりて出征し其劃策する所頗る多かりき

陸軍少將從四位勳二等功二級　藤井茂太

藤井少將は播磨國神崎郡栗賀村字福本に生まる明治八年陸軍戶山學校に入り同十年士官學校に轉し同十二年砲兵少尉に任せら

れ同十七年陸軍大學校に入り同二十三年卒業獨逸に留學を命せられ同二十六年業成りて歸朝するや直ちに陸軍大學校の敎官となり同二十七八年の日淸戰役には第二軍司令部の參謀長として從軍し金州旅順の戰に參加して大に計劃する所あり凱旋後功四級に敘せられ同三十年埃太利公使官附武官として維納府に駐在し同三十三年歸朝して再び陸軍大學校敎官に復し同三十四年少將に任せらる同三十七八年日露戰役には黑木軍の參謀長として出征し鴨綠江、九連城を經て蛤蟆塘、岫巖、甕馬集、靡天嶺、蠶陽邊門、楡樹林子、遼陽、淸河城、奉天、鐵嶺等に奮戰して大捷を得右軍として常に奇策の下に好成績を擧げ以て戰局を全からしめたり將軍の功又大なる哉

陸軍少將正五位勳二等功二級　嶋村干雄

島村少將は高知縣士族にして安政四年六月を以て生る明治十年六月少尉となり同十八年八月歩兵大尉に進み同二十四年九月少佐となり同三十二年三月大佐に昇り同三十七八年日露戰役には少將となり歩兵第十二旅團長として第一軍に屬して出征し戰功あり勳二等功二級を賜はる現に歩兵第四旅團長たり

陸軍少將正五位勳二等功三級　村田惇

村田少將は東京府士族高野勘四郎の次男にして安政元年十月を以て生る慶應元年二月先代村田政の養嗣子となり明治十五年二月家督を相續す同十二年二月陸軍砲兵少尉に任し同十九年佛國に留學を命せられ同二十一年更に伊太利に留學同三十五年五月陸軍少將に昇進せり其間又砲兵射的學術敎官、第四師團參謀長東宮武官、露國公使館附武官等の職を經て統監府附となり現に

韓國に駐在す日清戰役には功四級金鵄勳章を賜はり同三十四年北清事件の功により功三級を賜はり同三十七八年日露の役には大本營幕僚として出征し大に威武を輝せり

陸軍少將從四位勳二等　兒玉軍太

兒玉少將は山口縣士族にして嘉永四年五月を以て生る明治三年十一月准大尉となり同四年八月大尉に進み同十七年九月步兵少佐となり次で三十三年四月大佐に昇り步兵第三十一聯隊長に補せられ同三十七年九月少將に陞進せり現に步兵第二十八旅團長たり

陸軍少將正五位勳二等功三級　今村信敬

今村少將は東京府士族にして安政元年二月を以て生る明治七年六月少尉となり同十六年二月步兵大尉に進み同二十二年十一月少佐となり同三十四年一月大佐に昇り日露戰役の際は步兵第少四聯隊長として島村(千雄)旅團に屬して出征し功を以て勳二等功三級を賜はる現に步兵第二十三旅團長たり

○海軍少將（附下瀨工學博士）

海軍少將正五位勳二等功二級　島村速雄

島村少將は士佐の人安政五年五月を以て生れ家世々武を以て著る幼にして父を喪ひ賢母廉子の手に鞠育せられ備さに悲愴慘憺の行程を閱みし其海軍兵籍に入りしは實に明治七年十月なりき同十九年七月大尉となり同二十七年十二月少佐に進み日清戰爭には松島艦にありて太孤山沖に奮戰し敵彈の爲めに負傷す後中

佐に任し同三十二年九月大佐に陞進せり三十七八年日露戰役に際しては東鄕聯合艦隊の參謀長となり專ら作戰計劃に參す東鄕大將征途に上らんとする時將軍を起して曰く「作戰の事は一に島村に俟つと島村將軍亦曰く「余を知る者は東鄕閣下のみ」と其互に相信賴せること斯の如し人は將軍に許すに海軍部內唯一の作戰家を以せり智勇兼備奇才縱橫に溢出し幾多猛將勇士をして充分に其勇氣を發揮せしむるの機會を與へ以て偉大なる戰勝の光榮を輝かしむるに至る嗚呼東鄕大將ありて而して島村少將あり島村少將ありて而して後東鄕大將あり東鄕島村二將ありて我艦隊の大提を得世界列國をして我武勇を驚嘆せしむ蓋し謂なきに非す

海軍少將正五位勳二等功二級　加藤友三郎

加藤少將は舊廣島藩士にして文久元年二月を以て生る家世々儒を以て名あり父は七郎兵衛といひ家兄加藤菊之助（後步兵大尉）を以て物故）と共に父の膝下に嚴重なる敎訓を受け長して豐島陸軍少將（陽藏）等と共に船越男爵家に寄寓し傍ら海軍兵學校に學べり明治十六年海軍少尉に任し同二十七八年戰役に出征して功あり同三十二年大佐に陞り同三十五年常備艦隊參謀長に補せらるる征露の役起るや第二艦隊參謀長として諸方面に轉戰したるが戰半にして島村少將の後を繼きて聯合艦隊參謀長となり東鄕大將を輔佐すること頗る多かりき人は島村將軍に許すに海軍部內唯一の戰家を以てせり同時に加藤將軍に許すに海軍部內唯一の戰家を以てせり島村將軍の參謀長としての價値の殆んと獨步なるは今更喋々せすとも可なり加藤將軍の讀書に至りては其書悉く軍事に關するものゝみにして更に文學其他の雜書を交へす故に將軍の目に映するものは悉く韜略の文字にして詩歌を解せす

風流を辨せす一個の武辨たるには萬千の機智を包みて醫然たり日本海大捷の基を開きたるもの實に此好將軍の籌策に出てしなり

海軍少將正五位勳三等功三級　伊地知彦次郎

伊地知少將は薩摩の人故伊地知季達の次男なり幼より寡言沈默事に臨んで動かす頗る大人の風あり長するに及んで身を軍籍に投し明治十六年海軍少尉に任し爾來累進して少將に至る嘗て今井兼昌氏と共に佛國より購入の水雷艇單獨航海を其節に建議して其名を馳せ後伊太利公使館附武官として彼地にありしが日清戰爭の開始せらるゝに及ひ召還せられて威海衛の海戰に加はり大に勳功を樹て後松島艦長となり多數の候補生を從へて遠洋航海を試み海上艦の機關を損して爲めに進航の自由を失ひ終に無人島に上陸するを得て天幕を張り魚介を食して飢に充て殆んど生還を期せさりしに外國船の通航に遭ひ少量の水を得て渴を凌き具さに艱苦を嘗めて漸く歸還するを得たり日露戰爭の際は東郷司令長官の座乘せる三笠艦長として威名一世に高く幾多海戰に其手腕を振へり少將未だ尙壯吾人か此好將軍に待つ所頗る大

海軍少將正五位勳二等功三級　山田彦八

少將は鹿兒島縣出身にして安政二年二月を以て平の馬場に生る夙に海軍兵學校に入り卒業後直ちに海上勤務となり艦船操縱を以て已の任務となし海上軍人の名あり明治十九年六月大尉となり同二十四年十二月少佐に進み日清戰爭の際は軍艦吉野の副長として大に勳功を顯はせり同三十年六月大佐に昇進し三十七八

年日露戰役には朝日艦長として勤務し戰爭中少將に任せられ第五戰隊司令官となり各所に轉戰して頗る武名を輝せり少將寡言にして沈毅甞て夫人が日清戰爭の狀況を問ひたりしに遂に一言半句の答をも爲さざりしといふ

從五位勳三等工學博士 下瀨雅允

下瀨博士は鹿兒島藩士德之助の長男にして安政六年十二月を以て生る明治十七年工科大學を卒業し後印刷局に出仕し黑色揉印インキを發明し功を以て金若干を賞賜せらる同二十年海軍三等技手に轉し同二十六年同技師に昇進す同年有力なる爆烈藥を發明し之を採用せんことを海軍省に請へり同省にては試驗の結果其有效なるを承認し之を採用することに決定せり功を以て勳五等に敘し金千二百圓を下賜せらる同三十二年工學博士の學位

日露戰爭紀念將官列傳

終

を受け爾來海軍造兵廠製造所（東京府北豐島郡澁谷村）長たり明治三十七八年日露戰役しは下瀨火藥の發明は二十世紀の初に於ける世界の大發明にして日露變戰に際し我海軍をして絕偉の功を奏せしめたるものなれば日露戰爭に從事したる陸海軍將校を記するに當り其逸すべからざる偉人の傳を附せり

◎附錄

大日本帝國陸軍各師團配備表（明治四十年改正發表）

近衛師團（東京）

- 步兵第一旅團（東京）
- 步兵第二旅團（同）
- 騎兵第一旅團（同）
- 野戰砲兵第一旅團（同）

近衛步兵第一聯隊（東京）
近衛步兵第二聯隊（同）
近衛步兵第三聯隊（同）
近衛步兵第四聯隊（同）
近衛騎兵聯隊（同）
騎兵第十三聯隊（同）
騎兵第十四聯隊（同）
近衛砲兵聯隊（同）
野戰砲兵第十三聯隊（同）
野戰砲兵第十四聯隊（同）
近衛工兵大隊（同）
近衛輜重兵大隊（同）

第一師團（東京）

- 步兵第一旅團（東京）
- 步兵第二旅團（同）
- 騎兵第二旅團（習志野）
- 野戰砲兵第二旅團（國府臺）
- 野戰砲兵第三旅團（下志津）
- 重砲兵第一旅團（横須賀）

步兵第一聯隊（東京）
步兵第四十九聯隊（甲府）
步兵第三聯隊（東京）
步兵第五十七聯隊（佐倉）
騎兵第一聯隊（東京）
騎兵第十五聯隊（習志野）
騎兵第十六聯隊（同）
野戰砲兵第一聯隊（東京）
野戰砲兵第十五聯隊（國府臺）
野戰砲兵第十六聯隊（同）
野戰砲兵第十七聯隊（同）
野戰砲兵第十八聯隊（下志津）
工兵第一大隊（東京）
輜重兵第一大隊（同）
重砲兵第一聯隊（横須賀）
重砲兵第二聯隊（同）

交通兵旅團（千葉）

交通兵聯隊本部（千葉）
交通兵第一大隊（同）
交通兵第二大隊（同）
交通兵鐵道第三大隊（津田沼）
交通兵電信大隊（中野）
交通兵氣球隊（中野）

第二師團（仙臺）

- 步兵第三旅團（仙臺）
- 步兵第二十五旅團（山形）

步兵第二十九聯隊（仙臺）
步兵第六十五聯隊（若松）
步兵第四聯隊（仙臺）
步兵第三十二聯隊（山形）
騎兵第二聯隊（仙臺）
野戰砲兵第二聯隊（同）
山砲兵第一大隊（同）
工兵第二大隊（同）
輜重兵第二大隊（同）

第三師團（名古屋）

- 步兵第五旅團（名古屋）
- 步兵第三十旅團（津）

步兵第六聯隊（名古屋）
步兵第六十八聯隊（岐阜）
步兵第三十三聯隊（名古屋）
步兵第五十一聯隊（津）
騎兵第三聯隊（名古屋）
野戰砲兵第三聯隊（同）
工兵第三大隊（同）
輜重兵第三大隊（同）

第四師團（大阪）

- 步兵第七旅團（大阪）
- 步兵第三十二旅團（和歌山）
- 重砲兵第三聯隊

步兵第八聯隊（大阪）
步兵第七十聯隊（篠山）
步兵第三十七聯隊（大阪）
步兵第六十一聯隊（和歌山）
騎兵第四聯隊（大阪）
野戰砲兵第四聯隊（同）
工兵第四大隊（同）
輜重兵第四大隊（同）
重砲兵聯隊本部（由良）
重砲兵第一大隊（深山）
重砲兵第二大隊（福良）
重砲兵第三大隊（由良）

第五師團（廣島）

- 步兵第九旅團（廣島）
- 步兵第二十一旅團（山口）
- 重砲兵第四聯隊（藝豫）

步兵第十一聯隊（廣島）
步兵第二十二聯隊（松山）
步兵第四十二聯隊（山口）
步兵第七十一聯隊（廣島）
騎兵第五聯隊（同）
野戰砲兵第五聯隊（同）
工兵第五大隊（同）
輜重兵第五大隊（同）
重砲兵廣島大隊（同）
重砲兵忠海大隊（忠海）

第六師團（熊本）

- 步兵第十一旅團（熊本）
- 步兵第三十六旅團（鹿兒島）

步兵第十三聯隊（熊本）
步兵第二十三聯隊（同）
步兵第四十五聯隊（鹿兒島）
步兵第六十四聯隊（都城）
騎兵第六聯隊（熊本）
野戰砲兵第六聯隊（同）
工兵第六大隊（同）
輜重兵第六大隊（同）

第七師團（旭川）

- 步兵第十三旅團（旭川）
- 步兵第十四旅團（同）

步兵第二十五聯隊（札幌）
步兵第二十六聯隊（旭川）
步兵第二十七聯隊（同）
步兵第二十八聯隊（同）
騎兵第七聯隊（同）
野戰砲兵第七聯隊（同）
工兵第七大隊（同）
輜重兵第七大隊（同）
重砲兵函館大隊（函館）

第八師團（弘前）

- 騎兵第三旅團（盛岡）
- 步兵第四旅團（秋田）
- 步兵第十六旅團（弘前）

步兵第十七聯隊（秋田）
步兵第五十二聯隊（弘前）
步兵第五聯隊（青森）
步兵第三十一聯隊（弘前）
騎兵第八聯隊（盛岡）
騎兵第二十三聯隊（同）
騎兵第二十四聯隊（同）
野戰砲兵第八聯隊（同）
工兵第八大隊（同）
輜重兵第八大隊（同）

第九師團（金澤）

- 步兵第六旅團（金澤）
- 步兵第三十一旅團（富山）

步兵第七聯隊（金澤）
步兵第三十六聯隊（鯖江）
步兵第三十五聯隊（金澤）
步兵第六十九聯隊（富山）
騎兵第九聯隊（金澤）
野戰砲兵第九聯隊（同）
工兵第九大隊（同）
輜重兵第九大隊（同）

第十師團（姫路）

- 步兵第八旅團（姫路）
- 步兵第二十旅團（福知山）

步兵第十聯隊（姫路）
步兵第四十聯隊（鳥取）
步兵第二十聯隊（福知山）
步兵第三十九聯隊（姫路）
騎兵第十聯隊（同）
野戰砲兵第十聯隊（同）
工兵第十大隊（同）
輜重兵第十大隊（同）
重砲兵舞鶴大隊（舞鶴）

第十一師團（善通寺）

- 步兵第十旅團（德島）
- 步兵第二十二旅團（善通寺）

步兵第十二聯隊（丸龜）
步兵第六十二聯隊（德島）
步兵第四十三聯隊（善通寺）
步兵第四十四聯隊（高知）
騎兵第十一聯隊（善通寺）
野戰砲兵第十一聯隊（同）
工兵第十一大隊（同）
輜重兵第十一大隊（同）

師團	旅團	部隊
第十二師團(小倉)	歩兵第十二旅團(小倉) 歩兵第三十五旅團(福岡) 重砲兵第二旅團(下關)	歩兵第四十七聯隊(小倉) 歩兵第七十二聯隊(大分) 歩兵第十四聯隊(小倉) 歩兵第二十四聯隊(福岡) 騎兵第十二聯隊(小倉) 野戰砲兵第十二聯隊(同) 工兵第十二大隊(同) 輜重兵第十二大隊(同) 重砲兵第五聯隊(下關) 重砲兵第六聯隊(同) 重砲兵對馬大隊(鷄知) 警備歩兵對馬第一大隊(嚴原)
第十三師團(高田)	歩兵第十五旅團(新發田) 歩兵第二十六旅團(高田)	歩兵第十六聯隊(新發田) 歩兵第三十聯隊(村松) 歩兵第五十聯隊(松本) 歩兵第五十八聯隊(高田) 騎兵第十七聯隊(同) 野戰砲兵第十九聯隊(同) 工兵第十三大隊(小千谷) 輜重兵第十三大隊(高田)
第十四師團(宇都宮)	歩兵第二十七旅團(水戸) 歩兵第二十八旅團(宇都宮)	歩兵第二聯隊(水戸) 歩兵第五十九聯隊(宇都宮) 歩兵第十五聯隊(高崎) 歩兵第六十六聯隊(宇都宮) 騎兵第十八聯隊(同) 野戰砲兵第二十聯隊(同) 工兵第十四大隊(水戸) 輜重兵第十四大隊(宇都宮)
第十五師團(豊橋)	歩兵第十七旅團(豊橋) 歩兵第二十九旅團(靜岡) 騎兵第四旅團(豊橋)	歩兵第十八聯隊(豊橋) 歩兵第六十聯隊(同) 歩兵第三十四聯隊(靜岡) 歩兵第六十七聯隊(濱松) 騎兵第十九聯隊(豊橋) 騎兵第二十五聯隊(同) 騎兵第二十六聯隊(同) 野戰砲兵第二十一聯隊(同) 工兵第十五大隊(同) 輜重兵第十五大隊(同)
第十六師團(京都)	歩兵第十八旅團(敦賀) 歩兵第十九旅團(伏見)	歩兵第九聯隊(大津) 歩兵第十九聯隊(敦賀) 歩兵第三十八聯隊(伏見) 歩兵第五十三聯隊(奈良) 騎兵第二十聯隊(京都) 野戰砲兵第二十二聯隊(同) 工兵第十六大隊(伏見) 輜重兵第十六大隊(京都)
第十七師團(岡山)	歩兵第三十三旅團(岡山) 歩兵第三十四旅團(松江)	歩兵第四十一聯隊(福山) 歩兵第五十四聯隊(岡山) 歩兵第二十一聯隊(濱田) 歩兵第六十三聯隊(松江) 騎兵第二十一聯隊(岡山) 野戰砲兵第二十三聯隊(同) 山砲兵第二大隊(同) 工兵第十七大隊(同) 輜重兵第十七大隊(同)
第十八師團(久留米)	歩兵第二十三旅團(大村) 歩兵第二十四旅團(久留米)	歩兵第四十六聯隊(大村) 歩兵第五十五聯隊(佐賀) 歩兵第四十八聯隊(久留米) 歩兵第五十六聯隊(同) 騎兵第二十二聯隊(同) 野戰砲兵第二十四聯隊(同) 山砲兵第三大隊(同) 工兵第十八大隊(同) 輜重兵第十八大隊(同) 重砲兵佐世保大隊(佐世保) 重砲兵長崎大隊(長崎)

備考 臺灣、韓國、滿洲ニ在ル常備團隊ハ本表以外トス

◎日露戰役誌

三十七年二月五日 日露外交斷絶ノ通牒ヲ爲ス

六日 清韓兩國局外中立否定地發表セラル

八日 仁川港内ニ於テ瓜生少將ノ强胆敵前上陸ヲ終ル又旅順港外ニ東郷司令長官ハ聯合艦隊ヲ率ヒテ初陣ノ功露艦三隻ニ大損害ヲ與フ

九日 瓜生艦隊ハ仁川港外ニ於テ露艦二隻ト戰ヒ遂ニ自ラ爆沈セシム

十日 宣戰詔勅下ル

十一日 露艦我北海ニ出沒シ福山沖ニテ我商船那古浦丸ヲ擊沈ス其無法ヲ憤リ國民ノ激怒雷ノ如シ

十二日 大本營ヲ宮中ニ設定セラル

十三日 日進、春日、ノ二軍艦無事着ス

十九日　宮中ニ於テ後備聯隊旗ヲ親授セラル
廿四日　旅順港第一回閉塞決行
三月　六日　我艦隊ノ一支隊ハ上村司令長官ノ下ニテ露寒風雪ヲ犯シ浦塩斯徳港ヲ攻撃ス
十　日　旅順口外彼我驅逐艦ノ劇戰舷々相摩ス敵艦「ステレグスチ」號ヲ捕獲ス
廿七日　第二回閉塞決行軍神廣瀬中佐戰死ス
廿八日　近衛師團定州ヲ占領ス
四月十三日　此日我器械水雷ノ爲メ敵ノ旗艦「ペトロポーロクス」ヲ沈没シ其司令官マカロフ中將戰死ス
廿五日　金州九元山沖ニ於テ露艦ノ爲ニ撃沈セラル
廿六日　我第一軍鴨綠江ノ九里島、砬定島ヲ占領ス
三十日　我鴨綠江ノ架橋工事終ル
五月　一日　我第一軍ノ總攻撃九連城及安東縣ヲ占領ス

三　日　第三回旅順口閉塞ヲ決行終ニ目的ヲ達ス
六　日　第一軍鳳凰城ヲ占領ス
　　第二軍普蘭店ヲ占領ス
七　日　第一軍寬甸城ヲ占領ス
十五日　我海軍大災禍吉野初潮外戰闘艦一臾沈沒
十九日　第四軍大孤山ニ上陸ス
廿六日　第二軍ハ南山ノ堅壘ニ向テ奮撃突進大激戰遂ニ占領ス
廿八日　第一軍蠶陽邊門占領ス
三十日　第二軍青泥窪南關嶺ノ堅壘ヨリ柳樹屯ヲ占領ス
六月　七日　第一軍甕馬集占領ス
八　日　第四軍岫巖占領ス
十二日　第一軍枝隊懷仁縣ヲ占領ス
十四日　得利寺ノ大激戰吾軍大勝利
十五日　浦塩ノ露艦亡海ニ現ハレ我運送船和泉丸、佐土丸ヲ撃チ

常陸丸ヲ沈沒セシム後備步兵第一聯隊全滅須知中佐聯隊旗ヲ燒キ自盡ス壯絕悲絕

廿一日 第二軍熊岳城ヲ占領ス

廿三日 旅順口ノ露艦隊大擧シテ我艦隊ヲ襲フ直ニ應戰シ遂ニ港內ニ擊退セシム

廿四日 旅順攻圍軍劒山歪頭山及小平島ヲ占領ス

廿七日 大孤山上陸軍ハ激戰ノ後分水嶺ヲ占領ス

廿九日 第一軍北分水嶺ヲ占領ス

七月 一日 第一軍ノ一部隊摩天嶺ヲ占領ス

五日 我軍艦海門號敵ノ機械水雷ニ罹ニ沈沒ス

六日 第一軍ノ枝隊咸廠ヲ占領ス

九日 第二軍六日ヨリ九日迄ノ激戰ニテ蓋平我有ニ歸ス

十三日 摩天嶺ノ逆襲我軍勇敢擊退ス

十四日 伏見宮大將殿下戰地ヨリ凱旋セラル

十七日 我軍細河一帶高地ヲ占領ス

廿二日 第三回摩天嶺逆襲來ル我軍擊退ス大孤山上陸軍盤嶺ヲ占領

廿三日 我軍湯池附近ヨリ進ンテ孟家屯南方高地朱子字ニ亘ル陣地ヲ占領ス

廿五日 第二軍大石橋、營口ヲ占領ス

卅一日 第一軍ハ塔灣ヲ占領シ大孤山上陸軍ハ析木城ヲ占領ス

八月 一日 第一軍ハ楡樹林及樣子領ヲ占領ス敵ノ軍團長ケルレル將軍戰死ス

三日 第二軍ハ牛莊、海城ヲ占領ス

八日 攻圍軍大孤山、小孤山占領ス

十日 黃海ニ於テ彼我艦隊大激戰アリ敵艦隊四分五裂敗走ス

十二日 露艦芝不ニ遁竄セル「レシテルヌイ號」捕拿ス

十四日 上村艦隊蔚山沖ニ於テ烏港艦隊ヲユドヌフタ號ヲ擊沈

シ他ノ二隻大ノ損害ヲ加ヘテ我運送船ノ仇ヲ恢復ス

十六日 軍使山岡少佐聖旨勅降書ヲ旅順敵將ニ傳エタリ翌十八日敵將ヨリ拒絶ス

十九日 水陸協力旅順第一回ノ總攻撃開始ス

廿二日 我軍盤龍山東西二砲臺ヲ占領ス此ノ役我ノ損害壹萬五千人

廿四日 遼陽方面ニ向テ攻撃ヲ始ム

廿六日 右翼軍(第一軍)紅沙嶺孫家塞ノ敵ヲ破ル左翼軍(第二軍)モ中央軍ト氣脈ヲ通シ運動開始ス

廿七日 右翼軍ハ前日ノ敵地ヲ占領シ尚追撃中左翼中央ノ二軍ハ下石橋子、候家屯蘇馬臺ヲ占領ス

廿八日 右翼軍ハ英守堡ノ敵ニ向ッテ進軍ス左翼軍、中央軍ハ下房身鞍山店防禦地ヲ占領ス

廿九日 第一軍ハ英守堡、石咀子胴山子ノ線ヲ占領ス、第四軍ハ潘

家燈附近ヲ占領ス、第二軍ハ沙河方面ノ漁家臺ヲ占領ス

三十日 第一軍ハ翌三十一日ニ亘リ太子河岸ニ追リ第四軍ト氣脈ヲ通シ激戰中

廿一日 第二軍ハ首山堡附近ノ敵ヲ破ル第二軍ノ右翼ハ第四軍ノ左翼ト連絡シ早飯屯、高地ヨリ新立屯ヲ占領ス

九月 一日 第一軍ハ太子河右岸ヲ占領ス

四日 遼陽ノ大敵ヲ亡ボシ全ク占領ス近古無前ノ激戰

五日 第一軍ノ追撃隊玉門子山ヲ占領ス

六日 我大元帥陛下ヨリ優詔滿州軍總指揮官大山元帥ニ下ル

十九日 我攻圍軍ハ第二回攻撃ヲ始ム、右翼隊ハ松村中將中央隊ハ大島中將左翼隊ハ土屋中將

二十日 三方ノ攻撃激シク屍山ヲ越ヘ血ノ川ヲ浴ビテステッセル砲臺海鼠山ノ堅壘ヲ陷シ黑鳩公砲臺ヲ占領ス

廿一日 松村將軍ノ苦戰山本少將三原大佐以下ノ將卒滿身鮮血

灣リテ攻擊中、

廿二日 右翼軍ハ二〇三高地ノ西北角ヲ一旦略取シタルモ後放棄セサルノ己ヲ得サルニ至ル

十月九日 本日ヨリ沙河ノ大會戰起ル、第一軍土門子嶺ノ占領

十一日 我軍楊家灣ヲ占領ス

十三日 第四軍ハ浪子街ヲ占領ス

十四日 第一第二第四各軍沙河方面ノ高地ヲ占領ス

十五日 沙河大會戰河孟ヲ隔テヽ對陣ス第四軍ハ沙河堡拉木屯ヲ占領ス

十六日 攻圍軍ノ中央ハ鉢卷山、堅壘及ヒ二龍山ノ塹壕ヲ取ル

廿六日 第三回旅順攻擊開始ス右ハ松樹山中央二龍山左ハ東雞冠山北砲臺ニ向ヒテ攻擊ス

卅一日 東雞冠山某砲臺一戸少將ノ勇猛遂ニ我有ニ確實ナラシ

メ一戸砲臺ノ名ヲ附セラル

十一月一日 我大口經砲ヲ以テ旅順西港內ニアル滊船二隻ヲ擊沈ス

其他旅順市街ニ多大ノ損害ヲ與ヘタリ

六日 大口經及海軍砲ヲ以テ旅順市街ノ武器庫ヲ射擊ス松樹山砲臺ノ火藥庫モ爆發セシム

廿六日 旅順攻擊第四回決戰中村少將ノ決死白襷隊起ル

三十日 旅順富士ト呼ハレシ二〇三高地ハ松村將軍十日間ノ激戰ニ鐵ト血トヲ以テ占領セシヲ以テ松村鐵血山ノ名起ル第七師團大ニ與ル

十二月六日 攻圍軍ノ右翼ハ赤坂山、寺兒溝三里橋、高地ヲ占領ス

十五日 二〇三高地占領以來觀測所ヲ設ケ日々我重砲隊ハ港內ノ敵艦其他建造物ヲ悉ク砲擊破壞シ終ル

十八日 我左翼勇猛東雞冠山北砲臺占領ス

廿八日 午前十時二龍山砲臺ヲ占領ス

廿一日 午前十一時松樹山砲臺ヲ占領ス

三十八年
一月一日 中央及左翼ハ望臺砲臺ヲ占領ステッセル將軍ハ此日部下諸將ト議シテ我軍門ニ降伏ヲ申込ム

三日 彼我全權委員開城規約ヲ調印ス

五日 我軍旅順口ニ水雷ヲ敷設ス開城擔保トシテ諸砲臺ヲ受理ス

六日 第三軍乃木司令官聯合艦隊東鄕司令長官ニ優詔下ル

十日 乃木、ステッセル兩將軍水師營ニ會見ス

十五日 旅順ノ受領了ル

廿九日 二十五日ヨリ二十九日ニ至ル極寒飛雪中黑溝臺大激戰

卅一日 黑溝臺勝利優詔下ル

二月廿一日 千合嶺及榛子嶺ノ敵ヲ走ラシテ占領ス

廿二日 金斗峪ヲ占領ス

廿四日 我軍破竹ノ勢清河城ヲ占領ス

廿八日 我軍進ンテ五龍口、五百牛象ヲ占領ス

三月 一日 尙左門ヲ占領ス

二日 我軍總攻撃姚千戶、松木堡子、四方臺、大民屯新民廳ノ各要地占領ス

三日 沙河軍大活動周官堡王秀臺占領ス王家子、小房身、孟達堡倭家堡、各要地占領ス

五日 逸牛象堡東孤嶺ヲ占領ス

七日 我軍益々活氣飛揚渾河左岸全地區占領ス

九日 撫順占領

十日 奉天府占領ス近世ノ最大戰

十四日 奉天府大會戰ニ付優詔滿州軍總指揮官ニ下ル

十六日 興京ヲ略取シ亦鐵嶺ヲ占領ス

十九日 我軍益々猛進開原ヲ占領ス

廿一日 昌圖ヲ占領ス

四月　四日　我軍武靖樹ヲ占領ス
十二日　蒼竹ヲ占領ス
十四日　英額城八家子ヲ占領ス
十五日　通化占領
五月　五日　露艦ノ窮暴我運送船八幡丸ヲ燒沈セシム
廿一日　畏クモ兩陛下ヨリ三萬八千圓傷病者へ下賜セラル
廿五日　我軍四面城ヲ占領ス
廿七日　日本海ノ大激戰露艦全滅空前絶後ノ大勝
三十日　聯合艦隊司令長官ニ空前ノ偉功ヲ奏シ云々ノ優詔下ル
六月　十日　我軍ハ西營子西平子ノ要地ヲ占領ス
十六日　四方城、双岔子、羅船口、馬家堡馬占領ス
二十日　鐵城占領ス哈爾賓愈々危シ
廿六日　瑷城占領ス露帝ノ憤慨病ヲ起サシメタリト聞ク
七月　三日　小村外相高平公使特命全權辨理大臣トナル

六日　我軍索哈連島ニ上陸ス
七日　樺太コルサコーフ府ヲ占領ス
十日　近藤岬ヲ占領ス
十二日　媾和談判地「米國ポーツマウス」ト決定ス
十三日　露國ウイツデ媾和全權委員ニ任ス
廿四日　我軍樺太首府アレキサンドロスキヲ占領ス
卅一日　樺太ノ敵將リヤヘノフ中將以下三千二百餘名我軍門ニ降ル
八月　九日　日露全權委員第一回ノ會見アリ
廿九日　媾和全ク成立ス我全權ノ提出セシ償金及樺太割讓其他ノ撤退儘ニ樺太南半ヲ得テ媾和シタルハ屈辱ナリトテ國民ノ大激怒ハ喚發セラレタリ
九月　一日　休戰條約調印

47
303

明治四十二年八月二十日印刷
明治四十二年八月廿一日發行

定價金四拾五錢

不許複製

編輯者　日露戰爭紀念社編輯局
右代表者　長谷川安民
東京市神田區美土代町壹丁目四拾四番地

發行者　長谷川安民
東京市神田區美土代町壹丁目參番地

印刷者　田中定次郎
東京市神田區美土代町壹丁目參番地

印刷所　勢英舍
東京市神田區美土代町壹丁目參番地

發行所　日露戰爭紀念社
東京市神田區美土代町二丁目四十四番地

31785
ナ

42
303

002874-000-9

42-303

日露戦争紀念将官列伝

日露戦争紀念社／編

M42

ACB-6424

26.11.30